特218
339

高野辰之講師述

日本演劇史（元祿後期）（上卷）

昭和九年度
東京帝國大學講義

啓明社發行

始

特218
339

日本演劇史

（元祿後期）（上卷）

昭和九・帝國圖書館

日本演劇史　目次

近松の世話浄瑠璃……一
(1)　心中物……四
1、曽根崎心中……一九
2、心中物の類別……三三
3、心中二枚絵草紙……三七
4、心中双は氷の朔日……四一
5、生玉心中……四四
6、心中重井筒……四七
7、心中天網島……五〇
(2)　業人同志の情死……六一
1、嬉野山女人堂心中萬年草……六三
2、今宮心中……六八

3. 與兵衛ひがりめん卯月の紅葉……七二
4. あとおひ心中卯月の潤色……七六
5. 心中宵庚申……七八
(3) 旁通物……八五
1. 堀河波の鼓……八七
2. 鑓権三重帷子……九一
3. 大経師昔暦……一〇〇

日本演劇史（元禄後期）

高野辰之講師述

近松の世話浄瑠璃

元禄時代に於ける操芝居を説いて、その脚本即ち浄るりに関しては近松の作を代表と見、それと歌舞伎劇との交渉の説明上に多少の寄與をなす事を方針として、詞材の性質から類別を試みて、その時代物七十五、六篇を説くに既に一年有半を費した。蓋し、浄るりの總てに就いて豫定は二ヶ年であった。今、餘す所は僅か半ヶ年に過ぎないが、世話物は讀んで味ふには時代物よりも興味多く、從って廣く讀まれて居るが故に、説明は簡略を旨としても恐らくは謗を免るべきであらう。然し乍ら、讀むべ

き責を負うてたった人は少かるべく、又、當に讀むべくして讀まざる者の多かるべきを思へば、閲講に當つて一喜一憂の情を禁じ得ない。

世話の意義。

世話に二つの意味がある。第一はその文字の如く世上の俗談を意味し、「下學集」にも『風俗 鄙談也』と註してある。かの諺を世話と言ふのも、世上の人の善く口にする語句と云ふ意に外ならぬ。第二は周旋又は盡力の意に用ひる。而して、世話物又は世話淨瑠璃と云ふは、世の俗談卑事を仕組んだ意のものである。言はゞ、今の新聞の三面記事に属するものを作品の題材としたと云ふ意味で、世話事と云ふも是と同じである。その世話事と云ふ言葉は、享保十二年刊行の「操年代記」に、「曽根崎心中」に就いて『是を一段淨るりにこしらへ。そねざき心中と外題を出しければ。町中よろこび。入るほどに水戸も芝居も忘いとう〳〵こしらへに物は入らず。世話事のはしめといひ。淨るりはおもしろし。云々』と見えて居る。役者評判記の類には、もっと古

い時代から見えて居るかも揃られないが、淨るり関係の書物でいへば是が先づ古くもあらうか。世話淨るりといふ語は、これよりは遅れて「外題年鑑」に、同じく「曽根崎心中」の條に『作者近松門左エ門。是、世上世話淨るりの始にて、竹本氏古今の大當りなり。』と記してあるのが目につく。

近松作の世話淨るりは總数二十四篇。此の人五十一歳の元禄十六年に、筆を執って始めて「曽根崎心中」を作り、享保七年、七十歳で作った「心中宵庚申」を最後とする。而してその取材としては情死の外に、姦通、駆落、委託金費消、殺人、強盗、等をも取り用ひたが、必ずしも実事のままに仕組まず、幾多の架空の人物、事迹を加へて意の赴くがままに綴り立てた作もある。別って次の四つとする。

1. 心中物
2. 姦通物

3. 所刑物
4. 假作物

(1) 心中物

心中の意義。　心中は元來、誠実又は熱情を心の内に藏するを表はす言葉であつたが、轉じては、熱情を証明する行為、即ち放仇、誓紙並に血書・断髪・入墨（黥）・切指、を指して心中又は心中立と云ひ、ひいて、男女合意の上相共に自殺する事を云ふ様になり、それを心中死又は心中と言つた。此處にいふ心中物は此の最後の意のものである。

自殺は人間以外の動物には行はれざる事なれば、當然のこと、心中は人間社會に限られた事で、是は太古から行はれたことと思ふ。かの大和の三山説話の如きも遠い神代の昔に、心中のあつた事を意味するのではあるまいか。二人の男が一人の女を爭ふ場合であれば、男同志が相爭つて相共に傷いて落命しても解決せられるが、一男一女が合意の上相共に

自殺しても解決して、此の場合是が心中である。又、女が窮して死を選び、二人の男が跡を追つて死んだら、それは、あとおひ心中である。三山説話は「萬葉集」の菟名日處女の説話の原となり、後れては「生田川」の説話となるのであるが、何れもあとおひ心中で、此の説話の生れた一面には、今のわれらが呼ぶ心中が行はれて居た事を示すのではあるまいか。

わが歴史上に於いては、允恭記に見えて居るのが最古である。即ち、木梨輕太子が同母妹の輕大郎女と姦して伊豫に流された時、輕大郎女がその跡を追つて共に自ら死んだ事件があり、兩人の唱和の歌が幾首か載せてある。是は明かに兄妹心中で、當時の社會が同腹所生の男女に情交を許さなかつた結果であつた。かゝる兄妹心中や普通の心中又はあとおひ心中は、歴世必ず行はれた事であらう。が、文學の上には江戸以前に之を見る事は極めて稀である。かの「常陸風土記」の童子女松原の古傳の如きは心中ではあるまいかの疑がある位で、この種の普通の心中は「

萬葉集」の上になり、「源氏物語」の中になり、又「今昔物語」にも見出しかねる。下って鎌倉時代の戦記物にもなく、「吉野拾遺」に至って初めて出遭ふ。此の書の巻三「里見主税之介下人之事」と題してある條で、下人即ち若党が内侍の童女（わらは）に見染められ、艶書を贈られて相許し、発覺して、童女は追放せられ男の許に隠れたが、到底隠れ果せるものではないので、両人は『このせこそはつたなからめ、後の世は久しうなどいひて、宵のうちにしのび出でけるにや、木ぶかき山かげに入り、二人もろともに刃にふして果てにけり』とある。未來に頼みを掛けて死ぬのであつて、後世の情死は概ね此の願の下に死を共にする様に傳へて居れば、此の心中の如きは正に典型的である。更に下って、謡曲や狂言の上にも心中はなく、幸若舞曲にもなく、江戸時代の文学に於て頓に続出するに驚かされる。蓋し、元和以後尚武の気は消失して、武力よりは金力の世となり庶民が擡頭するに至り、栄えるものは遊里や劇場であった。此の風尚の下降と文化の爛熟と士気の弛緩とは、此の事によっても省察される。而

して、世に謂ふ元禄時代は、屢々前にも述べたが如く、成金跋扈の時代で、彼等は僥倖により得た巨萬の富は、必ずしも之を子孫に傳へようとはせず、人の耳目を聳動せしむべき驕奢と豪遊とに費すを誇として、殆ど年ならずして落魄するのを寧ろ快心事として居た。かの紀國屋文左エ門は此の適例であらうが、ひとり彼ばかりでなく、三都に此の類の人の多かった事は、浮世草紙類の記事によっても知られる。諸國諸州にも多かったのである。而して、一般人は動もすれば是を羨望して、破産に陥る事を知り乍らも歩みを遊里の方に向けた。それも島原、新町、吉原あたりの太夫や天神を相手にするのでなく、又かういふ者を相手にすれば周囲の者が監督して心中といった破綻に迄陥らしめないのであるが、他の低級な遊里遊女では、忽ち遊蕩費のなくなる客と、借金に首の廻らぬ、又は思はぬ客に身請せられる遊女との間には、屢々心中沙汰が起るのであった。かの西鶴の「諸艶大鑑」（＝「好色二代男」、貞享元年刊）に、新町の端女郎で心中した者十三人の名を擧げてある。相共にだらけた元

禄の世では、必ずしも此を非難せず、素人も之を真似し、元禄の中期以後寶永、正徳、享保の初に至るまで、心中文学とも称すべきものは相継いで出た。それは續々として世に弘められ、次いで歌舞伎又は操りに仕組まれるといふ順序であったが、名人の演出は遂に心中の流行を來したと言はれる。言ふまでもなく、代表的な作者は近松で、此の人の作った歌舞伎の作には一篇もないが、世話淨るりの中には十有一が此であった。以て如何に心中が頻発したかが知られる。

但し、心中を材料とする事は、近松に起ったのではない。傳ふる所によれば、天和三年五月十七日の夜、大阪に遊女と客との心中があり、同地の三劇場が此を仕組んで演じたのが心中藝の始まりだと云ふ。後年、近松の作った「心中双は氷の朔日」の心中盡しの條に、『誰かとそめし此の契り、音に聞きしは生玉の、それが始めのだい市之丞』とあるのがそれらしい。西鶴が列擧した新町の端女郎の中にも、『大和屋の市之丞、』とある。元禄に入っては八年十二月に三勝半七の心中があり、岩井半四郎座で直に此を仕組んで、翌九年正月から「菊の色揚」と題して之を演じた。大いに迎へられて百五十日も興行を續けた。十二年正月には、大阪の嵐座で「傾城佛の原」の切に「石掛町心中」を出した。此の年の十二月八日には大阪の千日寺で心中をした者があり、翌年正月には京都の亀屋座で此を仕組んで「心中恭屋咄」と題して演じた。次いで岩井半四郎座でも此を演じ、荒木與次兵衛座でも演じた。かくして元禄十六年近松がお初徳兵衛の心中を出す以前に、歌舞伎物では幾多の心中物を演じて居たのである。然し近松の作は是等に比して拔群のものであり、此の心中を綴ったものから世話淨るりが起り、且つ榮える事になったのである。而して心中文學としては、近松の作が第一に数へられるに至った。

心中は支那にも少く、欧米には極めて稀に行はれた様に云はれるが、それは遠ふ。支那では、漢の建安年中、廬江府の小吏焦仲卿の妻が舅姑に虐待された為に夫婦心中を遂げて居るし、近く明代に及んでも佳死又

は雙斃と言ふ言葉を以て情死の意味に用ひて居れば、事実に於ては心中も数多くあったと見るべく、現在でも少からずあらうと思ふ。西洋に於てもまたRomeo and Julietの劇を引合に出すまでもなく、一八一一年かの詩人Heinrich von Kleistが人妻とWannseeに於て情死を遂げたのみならず、現時に於ても心中は少からず行はれて居る。唯我國に於けるよりも率が少い位のものである。（此の統計に就いては中央公論昭六、十一月號、井口孝親氏「情死新論」参照）。従ってわが國は情死國として少しも他に誇り得るものではない。然し乍ら、心中を美しい事とはせず、寧ろ一種の犯罪と認めて居る傾向あり、心中文学と名付くべき作品は余り出て居ない様である。然るにわが國に於ては、これを稱揚し、相対して死んだ男女に十分の同情を寄せて、彼等は死を選ぶ外には途がなかった様に仕組んで、是を絢爛な筆迹として感傷味たっぷりに描き出し、見物人をして同情と嗚咽を禁ぜざらしめる様に描出した。而してこの作者は近松であったのである。私はこれより直に近松の作品の紹介に入りたいが、それでは説いて委しからざる謗があらう。何故ならば、心中は何が故にわが國に多いか、元禄時代に入って何故に續出したか、又それが何で近松の筆に載せられたかを詳かにして居ないからである。心中に就いては既に色々の人が研究をして居る。例へば、

○歴史より見たる自殺特に情死　明治四二、史学雜誌二四一号　三上参次

○情死の研究及びその倫理的觀察　丁酉倫理講演集一四七輯　布川静淵

○情死の研究　明治四四、單行本　大道和一

○近松の心中物自由恋愛の復活　單行本　三田村鳶魚

○江戸時代の男女関係　昭和四、單行本　田中香涯

○情死の新研究　昭和六、一月号中央公論　高田保馬

○情死新論　昭和六、十一月号中央公論　井口孝親

其他

の類まだまだあるが、前述の理由に関しては、多くは死を軽んずるわが國民性のあらはれとなし、是に添へるのに元禄の世の經済狀態が心中を多からしめたと説くに止まつて居る。恐らくは是が主なる原因でもあらうが、単に、わが國民が没我の念に篤く、義理と人情に篤く、厳重な封建制度の下にあつた當時の日本では、今より社会的制裁が強く、それが為に駆落なんども容易でなくて、相共に死を選ぶ事が多かつたとも説いて居る。又來世に長く添ひ遂げようとする佛教思想も共つて居るとも説いて居る。成程、近松の作品などにはさうしてあるが、恋愛はもと共同生活を求めて已まぬもので、離れ〳〵に居る事は最大の苦痛であり、

又不幸と感ぜしめるものである。而して、此の共同合体が到底満されないとみた時には、彼等は死によりて即ち霊になりて結合しようとするのであつて、この点に於ては、西洋とわが國の人との間に何の區別もない道理である。從つて佛教の影響と見做すべきでもない。總じて西洋の心中にあつては、女は多く普通の娘で人妻との心中は少い。之に反してわが國では遊女最も多く是が著しい相違点である。而して是、心中にあらで金中なりと云ひ出さしめた所以である。金中は柳澤淇園の云ひ出したものの如く思はれて居るが、もつと〳〵古い頃からの説である。元禄十五年刊行の「東海道敵討」（都の錦著）の中に、

『それ、心中とは慾を離れ義を守り、貞を盡して死に臨むを云へり。今時の心中は三勝を始めとして其外の白痴（あほう）ども山吹色に惜まれてせう事なしの死物狂ひ。是等は皆犬死なれば、心中ではなうて禽獸ぢやと南岳悦山和尚の目利もをかし。』（巻三）

と見えて居る。禽獸は宜しく金中とあるべきである。

金中は正に事実であった。けれ共私は此の際に於て心中を社会学的に、又唯物史観的にみて立論しようと云ふのではなく、何故に元禄に入って心中が多かったかに就て一通りの考察をして見ようと思ふのである。私は経験のある者は誰しも肯くべき事実を基礎にして考へて見たいと思ふ。凡そ遊蕩に恥る者は常に感傷的一面を有する者であるが、その遊蕩費に窮して無理算段をする果は、約束の履行を為し得ざる事になり、此處に感傷の度ますます加はり遂に自暴自棄に陥り、最後には死により當面の苦痛を脱しようとするに至るものである。而して男の此の立場に同情して相手の女も死を共にすると云ふのが情死の経緯である。元来遊女も金に窮する生活を強ひられて居たのであれば、男女共に同一の事情の下に同情し合っての事とも解すべく同時に金中であったとも云ひ得るのである。

西鶴の心中観は実にそれであった。彼は「諸艶大鑑」の終に於て、二代男と呼ばれた遊蕩児が、四十五歳の時に越中の立山に上り、谷蔭に女

の泣く声を聞いて、そなたへ歩みを運べば、『男は脇ざし、女郎は剃刀、諸國の色人、心中死のありさまを』見せて居た事を記し、その中にふるさとの見知った遊女だけ眺めたが、新町のそれだけでも十三人あって、それらが半時許りの間血煙をあげて、萬物を紅に染めてみせたが、夜が明けてみると影も形もなかったと記して、その後にかう言って居る。

『されば此思ひ死を能く能く分別するに、義理にあらず、情にあらず、皆不自由より無常に基き、是非の差詰にて斯くは成れり。其ためしには残らず端女郎の仕業なり。男も名代の者は、たとへ恋はすがるとても為ぬ事ぞかし。雲井は太夫職にして、斯かるあさましき最後、今に不思議なり。とかくやすものは銭失ひと申せし。』（巻八「流れは何の因果經」）

と結んで居る。やはり立派な金中論で、かう見れば見られるのであり、情死をした遊女が低級なるのであった事も事実で、近松の作品にも大夫や天神で心中をした者は一人もない。やはりかこひ以下の低級娼婦で、

それも新町の様な大廓からでなく、北の新地即ち曽根崎や、道頓堀に近い伏見坂町又は島の内の六軒町あたりのおやまばかりが現はれて居る。是等は西鶴をして言はしむれば、また當今の唯物史觀からみたら、必ず金中とすべきであらうが、總てをさう見て了ふと、当事者の一人が美しき恋に殉じた場合を逸した懼がある。由來同情に富む近松、而も一般世人を相手とする興行物に筆を執つた近松は、曾て一度も冷い眼で見た事はなく、彼等両人は死を選ぶより外に方策なき場合に出遭つたとして仕組んで居る。然し、彼とて腹の底では金中と見て居た。その事は「長町女腹切」の叔母の言葉に、

『世間多い心中も銀と不孝に名を流し、恋で死ぬるは一人もない。』

と言はせてゐるのでも明かであるが、さう仕組んだのは、実事のままでは風教にも害があり、遺族からの苦情もあるべく、又見物の道徳感情をも満足させかねたので、義理に迫つての死としたのであるらしい。是が一般人を相手にする興行物にあつては免れがたい拘束であつたらう。此

の拘束の有無が近松西鶴の相違点であり小説と實演脚本の相違点であつた。近松の此の行き方は一般人に迎へられて、遂に彼の為に心中が奨励されたとさへ傳へられるに至つた。けれどもそれは事実に反する事で、近松が筆をお初徳兵衛の心中に執り始める以前に於て遊女間に多く行はれた事は、西鶴の作に見える如くであつたのである。又、元禄十六年刊行の「心中恋の捨」、宝永元年の「心中大鑑」に徴しても、當時諸方に心中流行し、特に大阪地方に多かつたのであるが、此に就いて田中香涯博士は、諸家の説を參酌して平明な解釈を下して居られる。それは、日本の國の台所だと唱へられて地方より百貨の輻輳する大阪には、早くから金持を生んだ。而してその町人が実力（金）と時勢との背景によつて擡頭し、新興文化の先駆者となり、中心勢力者となつたのが元禄時代の新現象である。殊に元禄八年の貨幣改鑄から通貨の膨脹となつて、大阪は益々商取引が盛になり、金持連は豪放闊達な生活を致す様になつた。それでも町人は町人で、武士には表向き頭を下げなければならんのであつた。そこで、その不平を彼等

の所有する金力で癒し得る遊里で大びらに享楽した。之を見做ふ小商人、手代、親がゞりの息子達は、身分相應の低級娼婦の許に赴いたのである、が、無理算段の果は切羽詰つて心中に至つたのである、と。また元來大阪は商業都市で、町民間の連結固く、他國へ逃れて自由に世を送らうとするが如き漂泊性を有せず、町民間の連帶の掟を破つて信用を失つた場合には、自己の社会的生存を取消すことの外に何物もないと云ふ觀念が強かつた。これが爲に戀愛によつて身を誤り、産をなくし遂に信用を失つた者は、心中を以て世を辞する事を最後の道と心得て居たと説かれて居る。これで男の方の説明は大凡つくが、女の方が余されて居る。私見に依れば、遊女は其の抱主から借金の根の切れない樣に仕向けられて、到底賠償の道は立たず、思ふ男に金はなく、思はぬ男に身請されて遠國に連れ行かれる恐れがあり、又このまゝ老いては末は遣手か女中奉公、いやそれよりも、そのうちには身に帶びて居る花柳病の爲に惱まされ、動もすれば倒死しなければならん樣になるかも知れない。その將來を思

つた事であらう。その爲に現世をはかなみ身の果を痛感する結果、思ふ男と身を終る事になるのではあらう。是は遊女に心中する者の多く生じた原因と考へられる。何も大阪に限つた事でなく、一般遊女に此の考のあつた事と思はれる。

要するに元禄時代は人の心のねぢの弛んだ時代、身分以上の春りや遊蕩を見えにした時代、同時に感傷気分の行き渡れる時代であつた。是と共に死を輕んじて体面を重んずる武士気質が漸く町人百姓の間に染み渡つて來た時代で、是等が主なる原因となつて情死が頻出したのである。それを近松が取扱つて人情と義理の葛藤によつて美化し醇化し、巧に戯曲化したのがあの世話物二十四篇であるとみればよからう。先づ最初の作「曽根崎心中」に就いて、その戯曲化の迹を調べて見るであらう。

1. 曽根崎心中

曽根崎の河べりの狭斜の地は『新地新菰や新よね』と謳されて、元禄

の末年は大阪市中の息子、手代、何れも以下の者の寄付く處であった。此處の天満屋のお初は京の島原から下った者で一般と目につく女であった。それと大阪の内本町の造醤油屋平野屋忠右エ門の手代徳兵衛とは、廓に近い曽根崎天神の森で情死した。それは元禄十六年の四月二十三日のことであった。當時、大阪に来合せて居た近松が、直ちに取って一篇の作品としたのが此の表題の作である。幸にして事実の眞相らしいものが「心中大鑑」卷三に載せてある。男の徳兵衛は別に貰ひ込みをしたのではなく、主人実は叔父の妻の姪と結婚する事を強ひられ、且つ江戸の店へ遣られるのがつらさに馴染の遊女お初に話すと、お初は畳後の客に身請の相談が出來て、近いうちに別れて行かねばならない場合であった。こゝで彼等は別離の思に堪へかねて、天神の森を汚すことになった。これが飾りのない事実であったらしい。

これだけではしかし何の紛糾も飾りもなく、人を動かす頂点もなく、如何に近松が絢爛の筆を以てしても、そのままでは劇になりさうもない。

そこで近松は假設の人物油屋九平次に敵役を演せしめ、徹々に徳兵衛の名誉を毀損して、生きては人に顔を合せられない様に仕組んだ。作はお初が客に連れられて三十三番の観音廻りをする所に始まる。是は二十年來行はれて居た事で、信心よりは遊山七分のものであったが、近松はおやま人形の名人辰松八郎兵衛をしてその手腕を発揮せしめる為、ここの敍述即ち道行に大いに力を用ひた。次いで生玉の茶屋の邂逅、故郷の縁母に金をはき出させる事、九平次への融通等を話す所へ九平次が來合はせる。徳兵衛が金の催促をすれば、一銭借った覚えもないと言ふ。証文を見せれば、此の証文の判は先月の廿五日に落したもの、これはそれから二日後の事と逆ねぢを喰はす。徳兵衛怒って立廻りとなるが、九平次一味に叩きつけられる。彼奴は天満屋の店先に始まり、徳兵衛の忍込、九平次の悪口、お初の決心、深夜の脱出、道行、死に終る。近松は此の順に敍述して、徳兵衛が一命を捨てなければならない様に仕組んだ。而して、お初の身請の事に関しては一語をも用ひて居ない。蓋し、美しい

恋の犠牲者にしたのであつて、一には彼の遊女觀をも見るべく、又一には天満屋に対する遠慮もあつて、斯う作りまげたのであらう。と思ふ。

傳へる所に據れば、此の心中の翌日外題看板をあげ、五月七日に初日を出した。目前の事実であり、近松も興行主も興行者も、平野屋一家の思はくや、天満屋の人気をも考へたに相違ない。そこで継母と九平次を作り出し、お初の身請沙汰を隠して、何処からも苦情の出ない様に工夫したものであつて、此の悲劇の誘因となる葛藤の増大は全く筆の先に作り出されたものである。

此の作の道行はかの荻生徂徠の嘆美したが如く、近松も得意であつたと見えて、此年、京都の油小路の表具屋助右卫門が上繪屋の小かんと心中したのを、近松は早雲座の爲に「唐崎八景屏風」と題して作つてあつたが、その中に、「からさき心中道行」と題して、この道行を殆んどそのまゝ用ひて居る。又、お初が脱け出さうとして有明行燈を消す所と、下女が火打石を探すをかしみとは、これも得意の所であつたらしく、「

心中二枚絵草紙」の中にも此の場の模様を引いて居る。下女が火打を打つ音に紛らかしてお初が軒む車戸を明ける細かい工夫も、後年「碁盤太平記」門破りにも「卯月紅葉」の庫破りの條にも用ひて居る。ひとり此の部分部分ばかりでなく一切が純世話物だと云ふ事がひどく世間を動かして、宇治加賀掾の座では直に取つて之を用ひ、豊竹若太夫の座では之を模倣して「心中涙の玉の井」を出した。「玉の井」では、男は久矣衛女はお初、お初は遊女でなく、糸屋の娘にしてあり、三十三番の観音廻りを住吉参りにし、天神の森への道行を河内下りにしてある。此の両人は、追手の者を野原の中に避け、古井戸に嵌つて二人共に死ぬ事にしてある。即ち仕組は大いに眞似てあるが、文章は拙劣で情も至らず景も至らず、比較にならぬ作品である。然るに「外題年鑑」が元禄十五年「曽根崎心中」の出る前年に、是が興行された様に載せたので、是を以て、世話淨るりの初めであり、且つ近松の「曽根崎心中」の前でもあるかの如く考へる人があるのは、全くの誤である。それは此の「玉の井」の

中に、

『そちのうちでもおもてでも、それ崎の心中は、南へうつってきそうな事、とかくおはつじや〳〵と、あて事いふもやまひになる』

と云ふ文句がある事によつても知られる。

続いて翌宝永元年に、曽根崎心中後日「遊女誠草」が上演された。曽根崎新地の丸屋のしげといふ遊女の一人心中を叙したもので、京の山本六兵衛で版行して居れば加賀掾の正本であらう。此のしげはお初を慕つて時々墓参したともあり、寺の住持も、お初の墓には花の枯れる事もなく、檀那衆の話に聞けば摂州の與まで曽根崎がはやると云ふが、恐らく松前でもはやるであらうと語つたとある。以て曽根崎心中が如何に一世を動かしたかを知る事が出來よう。尚この「遊女誠草」には他に種々注意すべき事がある。それは外でもない。「曽根崎心中」ではまだ九平次の後始末がなく、又、お初の親や平野屋の人達が此の事件の後の動静態度が示されてない。然るに、この「遊女誠草」に於ては、遊女しげが

馴染容井筒屋清六が、三度目の勘當を受けて頼つて來た時に、しげは心を改めて眞面目になつて家業を励む事を奬め、自分は無い縁と諦めてお初の跡を慕つて一人心中をする。そこへしげの遺言狀を見て、井筒屋主人が驚いて駆け着け、あたら惜しい女を殺した、身代金は幾らでも出すと言ひ、抱主はそれには及ばぬと言ふ男同志の挨拶があり、井筒屋主人はしげの弔ひを懇に頼み、清六の勘當を許し、且つしげの命日を丁寧に弔ふ事を頼み置いて帰る。さて次にはお初の両親が西國巡禮に出て、明日が忌日といふ日に曽根崎の森に辿り着く。身を持崩した九平次は此処に催網を張つて居る。様子を聞けば散々に悪口する。そこへ平野屋の丁稚長藏元服して長兵衛が手向の為に來合はせ、力を添へて九平次に向つたが、押しのめされて既に危い所へ、お初徳兵衛の幽霊が出て、九平次を締め殺す事を夢の中に示してある。即ち、因果律の支配は免れ難い事にして、見物の道徳感情を満足させてある。既に一應の戯曲化は近松によつて試みられたが、「遊女誠草」は更に一段と進めたものので、後年

近松の加筆は是に導かれて居る所が少くない。

近松の「曽根崎心中」は、その儘で度々繰返されたでもあらうが、文献の上には見出し得ない。正徳五年大阪の竜座で「曽根崎十三回忌」と題して上演したが、此時の筋も判然しない。享保二年に至って、竹本座で二度目の興行をした。此時にはもう近松自身の改作が演ぜられたかと思ふ。それは拙蔵の正本に増補本があって、出版當時の表紙をも存するが、表紙裏に

『享保五年子ノ正月吉日　川上氏』

と持主の記した文字がある。或は此の前年は、お初徳兵衛の十七回忌で、竹本善世太夫が曽根崎で操芝居をして居て、其時の正本ではないかの疑もないではないが、近松自身の増補なる事には何の疑もない。

此の改作振りには大いに注意を要する。即ち前作の儘では、平野屋主人は如何にも冷酷であり、九平次は何の報も受けずに済んで居る。恐らく是が此の世の実状でもあらうが、それでは見物が承知しない。そこで

作り改めて、平野屋主人（久右エ門）が徳兵衛の身を案じて天満屋に来り、お初に勧められて二階に上って待つ。徳兵衛が來て縁の下に隠れる事、九平次の悪口の事は原作の通り。お初は『どうも堪られず死に行く身の道連れに、己れだまして殺さうと』思って九平次を賺してこれも二階に上げる。小夜更けて、お初は脱け出て徳兵衛と曽根崎の杜へ向ふ。暫くあって、九平次の手代茂兵衛が惶しく走り來り、今日町次の印形改めに懸硯の二重目にあったのを持って行くと、此の切判は先月の廿五日に落したとて町々にまで貼紙せし其印判、懸硯にあったとは呑込まぬ。何分にも九平次に逢うて様子を聞かう。急いで連れて來い、とのお宿老殿の仰せに、方々尋ねて参りましたと言ふ。聞いて九平次大いに慌てる。其処へ久右衛門が躍り出し、九平次の目先に合口を突付けて、一切を天満屋の居る前で白状させ、自分は徳兵衛不便さに二貫目の銀は持って来たと言ふ。亭主は徳様のお声を最前聞きましたと言ふ。呼びにやると、下女がお初の部屋から書いた物がと書置を持って來る。はや心中に出た

ものぞと大騒ぎになる。久右エ門は早く二人を追つて最後を止めて呉れと頼み、自分は九平次を代官所へ連れて行く。然しその甲斐もなく、道行、情死となる。是が「遊女誠草」に導かれた点の少からぬ事は、再び繰返す必要はあるまい。而して此の上にもわが國民性を見るべきで、わが國にマクベス、ハムレットの如き結果を見る悲劇が現はれずいつも結末がめでたし〳〵に終るもののみ出た所以を知るべきであらう。

茲に附加へて述べたい事は、凡そ世間の評判取沙汰には、好意を以てその弱点や短所を隠して傳へようとするものと、強いてその失錯を誇張して傳へるものとの二種がある。此のお初徳兵衛の情死も、「心中大鑑」は恐らくその前者で、後者に属するものも亦出たのであつた。即ち「傾城風流盃杉」（五冊、刊年未詳）に據れば、お初徳兵衛は二人共に泉州かせぎの生れで幼馴染であつたが、徳兵衛が大阪の内本町の髪油屋へ十年期の奉公に來て市内を商ひして居るうちに、お初と蜆川で出合つたのが縁となつて、賣上高三貫目（五十両）を費消したとある。又、宝永七年版「俗扰草紙」には、天満屋のお初も眞の心中ではない、平野屋徳兵衛がやうに暦手形して散々にふみ叩かれ、等ともあつて、是等が悪宣傳側の代表である。若し此の方が本當の事実であつたとすれば、近松がその作の中に於て、徳兵衛をして唯一度より外主人の名を用ひて物を買つた事がない、等と言はせて居るのも怪しく、金の貸借も油屋九平次の詐欺ではなくて、どうやら悪い方は徳兵衛にありさうになる。けれ共金の事だけは、心中してから後七八年後の書物にあるのであれば、事件の眞相が忘れられた頃に、淨るりを取違へて書いたかの疑もあつて、俄にそれだけを信ずる事も出來ない。ひとり此の「曽根崎心中」のみならず、他の作にあつても、何如迄が戯曲化せられたのかと云ふ実相は明かにし難いと云ふ事を反復したい。而して近松の作を一貫して彼が常に同情を以て當事者の両人に汚点を残さしめまいと努めて居る事も、同じく茲に言添へたい。そこに彼の人生観、特に心中観を窺ひ知られさうに思ふ。

歌舞伎芝居に移された「曽根崎心中」。享保四年の彼等の十七回忌に

は、歌舞伎の座で申合せでもした様に曽根崎物を出した。即ち大阪の角座では「おはつ徳兵ヱ心中野中の時雨」と題して演じ、江戸の市村、中村、森田の三座では、おふさ徳兵衛の事迹に綴り合はせて曽我狂言にして追善興行をした。不幸にしてその筋書は傳らないが、享保九年、即ち近松の歿年の正月、大阪の角座で、「江戸絵浮世曽我」を演じた時の二番目に「曽根崎初夢曽我」と題して興行した。是に依って近松が一度増補した此の作が、更に如何に劇化せられたかゞ知られる。一言にしていへば、近松の趣向は上之巻に收め盡して、殺ひて散漫にして結局心中せしめるのが下之巻である。俳優の役の振り方の上からの都合でもあらうが、作者にとっては気の毒の情に堪へない。

享保十五年に江戸市村座で、「心中黒小袖」と題して道行の場を曽我狂言のうちに挾んで出したが、恐らく同じ筋であったであらう。越えて十八年二月豊竹座に於て「お初天神記」と題して出したが、是は近松の増補本を用ひて、歌舞伎の筋は取入れなかった。蓋し、繰りの特質を失

はしめないと共に、文の美しい所を聽かせると云ふ事をも考へて小細工を避けたのであると思ふ。但し、終りへ数行を書き加へて、久右エ門が危い所へ駆け付けてそれを止めたので、『死んだ取沙汰死なぬ沙汰。』と、作り替へてある。三十三回忌には二年程早いが、やはり追善の意味で興行したものであらう。其後、歌舞伎にも繰りにも前述の作を多少改めたらしい物は数回出て居るが、時が下れば下る程改悪状態で、繰り劇までが原作の文の美しさを捨てて、せりふ本位の「初夢曽我」の跡を追ったのであった。

近松半二は、前代の作を改めて當世風にするには卓抜の技倆を持って居た人で、「長町女腹切」を「京羽二重娘気質」に、「信州川中島合戦」を「本朝二十四孝」に、「心中天網島」は「心中紙屋治兵衛」に作り改めて、ともかくもその一部一段だけは今も興行せられて居る程だが、此の「曽根崎心中」だけは、余りに優秀であった為か、或は歌舞伎が趣向の上に奇巧を曲盡して了った為か、彼が明和五年に出した「讃賞三己」

も、安永七年に出した「往古曽根崎村噂」も、歌舞伎の仕組を更に改悪したもので、全く屋上屋を架して中心人物を不明にしたものである。

2 心中物の類別

近松は「曽根崎心中」の以後、殆ど毎年世話物に筆を執って、心中物だけでも十数篇ある事は前述の如くである。凡て當代の世相を現はすものので、遊女相手のものが最も多く、素人同志は却て少い。事実にあっては素人の間にも少からず行はれて居たが、一族その他からの苦情が出る恐れがある上に、遊女程には派手と深刻な叙述が施し得られなかったので扱はなかったのであらう。珍らしいのは、夫婦心中の作が二篇ある事である。一は家附の娘と聟養子との間に行はれ、一は姑との折合が悪い為夫婦養子の者が死ぬのだが、どちらも遊蕩道楽の果ではないだけに、あはれは一段と深い。次に類別して示す。

心中物の類別表

心中物

遊女相手

既婚者

1.
- 曽根崎心中・五・七
- 元禄十六・初
- 曽根崎天満屋
- 曽根崎内本町平野屋徳兵衛
- 天神の社

2.
- 心中二枚絵草紙
- 宝永三・三・二七
- 曽根崎天満屋おしま
- 長柄村百姓市郎右ヱ門
- 女・天満屋二階
- 男・長柄堤

3.
- 心中刃は氷の朔日
- 宝永七・六・一六
- 曽根崎新地平野屋小かん
- 備後町鍛冶屋弟子平兵衛
- 北野藍畑

4.
- 生玉心中
- 正徳五・八・一
- 伏見坂町柏屋おさが
- 松屋町茶碗屋嘉平次
- 生玉社内

未婚者

1.
- 心中重井筒
- 宝永四・
- 島之内六軒町重井筒屋おふさ
- 蔦芋町紺屋徳兵衛

2.
- 大師殿勧進所
- 心中天網島
- 享保五・十二・六

素人同士

既婚者

1.
- 心中蔦芋草
- 宝永五・四・一六
- 高野山吉祥院小性久米之助
- 紙谷宿雑賀屋お梅
- 紙谷宿女人堂

2.
- 今宮心中
- 宝永七・正・二三
- 本町二丁目菱屋手代二郎兵衛
- 今宮戎の森
- お針女おきさ

3.
- 卯月の紅葉
- 宝永三・六・一
- 心斉橋古道具屋女おかめ
- 養子兵衛
- 梅田堤たわれ心中

未婚者

1.
- 曽根崎紀伊国屋小春
- 天満御前町蔵屋治兵衛
- 網島大長寺藪外

2.
- 卯月の袖色
- 宝永四・四・二一
- 夫があとおひ
- 大和平群谷の庵室

3.
- 心中宵庚申
- 享保七・四・二二
- 新町油掛町八百屋半兵衛
- 女房お千代
- 生玉勧進所

以上

何れも小商人や職がゝり又は手代達が、低級な遊女揚代で、言はゞ、四匁か三匁の女、それを相手にしたのが遊女相手の心中物で、今も到る處に行はれて居さうだが、何の珍らしい事もなくて、新聞種にもなりさうにない事のみである。素人同士の材料も亦同様で、これもさまで新しい所がない。但し現代の如く親子心中又は一家心中の少しもない所に、生活上の脅迫と云ふものが激しくなかった事が知られる。これは昭和の新現象とも見るべきで、昨昭和七年の分を警視廳で統計したものを見ると、東京府下だけで三十四件、八十四人。死の道づれにされた子供四十四人。父十二人、母二十八人。その方法から云ふと、身投十二組、ガス六組、刃物五組、絞殺五組、服毒一組。原因は生活難十、家庭の不和九、病気六、精神異状四、他は不明となって居る。家庭の不和と云ふも、多くは生活難がその主因である。若し眞に社会詩人と称ふべき者あって、その深刻なるものを仕組んで演出せしめたなら、一世を感

動せしむる事、敢て元禄の世に劣らぬであらうに、劇の新旊相共に事の易きを選ぶのか、官憲の制裁を顧慮するのか、そこに厳しく存在するのを発見し得ないのか、ともかくも是等の新しい事実を仕組まず、古來周知の作を繰返して、それに多少明治以後の事迹を交へたものを以て番組を作り、それを善い事にして居る。罪は何処にあるか知れないが、それで日本劇の將來が卜定されるとするならば、黙って居られないではないか。茲に新しい近松の出現せざるを憾むと共に更めて元禄のせの近松の偉さを讃歎せざるを得ない。

3. 心中二枚繪草紙

是も同じく天満屋の遊女で、お初の後継として知られたお島が、長柄村の百姓の子の市郎右衛門との心中を仕組んだものである。張合ふ容があり、敵役に廻る者もあるのだが、その敵が弟だと云ふ所が新しい。上

之巻はお島が明石の客に揚げられて芝居帰りの舟の中で浄るりの道行を語り、市郎右衛門が陸で舟の跡を附けた所から、客との間に口論が湧くが、一切はお島の機轉で丸く納る。中之巻は弟の善次郎も大した道楽者で、諸方から借金の催促に閉口して帰宅すると、父介右衛門は今御本山へ納める所の冥加銭を預って居る。そこへお島から市郎右衛門に宛てた急使の文が来て、手紙は父の手に渡り鼻紙袋の中に仕舞はれる。善次郎はその鼻紙袋から鍵を取出して、懸硯の抽出から今の冥加銭を盗取って懐に入れ、餘りの一歩を隠しかねて、釜の上の御酒徳利の中へ隠す。兄の市郎右衛門野良仕事から帰って来て、餘りの寒さにその御酒徳利から酒をつがうとして一歩銀が入ってゐると喜ぶ。善次郎は兄に向ってお島から文が来て父の手に渡ってその鼻紙袋の中にあると教へる。兄がそれを開けようとする所を父に見附かり、紛失の金一切を身に負はされて勘當される、其上実子ではなく、さる人からの貰子だと言聞かされる。此の紙入の趣向は、元禄十年に都萬太夫座で興行をした「卯月九日明星其あかつき

茶屋」から出たもので、「明星茶屋」にあっては手代・仲間の事とし、此の「二枚絵草紙」では兄弟の間の事としたのであって、同巧異曲。徳利だけは作者の働きでもあらうか、甚だ自慢であったと見えて、後の「生玉心中」にも此を活用して居る。

下の巻はお島が茶屋で市郎右衛門から心中の相談を受けての帰途で善次郎に遇って醉に乗じて散々のあてこと言ふ。茲に見物が酒飲を下げる。さて帰って暇乞して寝間に入る。市郎右衛門立寄って斬下で咬けば、お島は二階から柄付の鏡を出して星影映して在處を知らせる。市郎右衛門も扇の金物の光に物を云はせる。細い事の限りで実際には出来さうもない事だが、大受に受けたと見えて後の「國姓爺」の楼門の場に繰返されて居る。善次郎はお島の詞に一念発起して兄の命を助けようとして来る。兄は見たがやりすごして、お島と自殺の刻限を打合せて別れる。斯くてお島は天満屋の二階で、市郎右衛門は長柄堤に於て、互に相手の幻を目に見つつ自刄すると云ふのが梗概である、而して善次郎は兄の行方

を尋ねて長柄堤へ来たが、せめては兄の死骸を人に見せまいとして葬夏つて立退く。茲に死んだ風説と死なぬと云ふ噂とあつて『生死二枚の絵草紙』が出たといふので、近松が此の外題の下に筆を執つたのであつて文章とその趣向の妙は彼等がその死の直前に互に相手の幻を見て死ぬ一段である。

按ずるに此の事実は宝永二年の十一月の事にして敍してあり、興行は翌三年の三月に至つて行はれたのである。生死二枚の絵草紙といふは、その心中當時の事に遠ひないが、なほ且つ近松が此の作に於て結末を飜気にしたのは、男が最後に及んで命が惜しくなつて姿を晦ました事が分つて來た為ではあるまいか。それならお島は丸屋しげの一人心中の跡を追つて美しい恋の犠牲となつたものであり、それがお初を眞に純なものとして寫した近松の筆の感化であつたと言はざるを得ない。少くとも宝永時代の頽廃期の遊女達には一人心中を以て美しいものとする事は今の三原山投身の如くに考へた事であらう。「曽根崎心中」と「遊女誠草」

と此の「二枚絵草紙」とには少からぬ聯関があると思ふ。因に云ふ。心中を絵草紙にして賣る事は古くからの事で延宝年中にはもう出て居た。

4. 心中又は氷の朔日

遊女相手の心中は必ず身請話に纏はる。男は金に窮し、女は厭な人の根引に逢ふと云ふので、愛に於て合一するを希つて、彼等は死を選ぶのである。歌舞伎狂言の御家物にあつては、身請をする者は家來筋又は本妻の廻し者で、若君や殿様の遊蕩の根を断つ為の手段として行ふもので結局はめでたし〳〵に終る。然るに此の表題の作はさう云ふ身請の筋であり乍ら結末は破綻に終る。是が抑も人生の常の姿でもあらうが、事の進行展開に於ては哀切痛酷、恐らくは仕組む本當の事実以上に出でて、作者に依つて少からぬ変化が施されたものであらう。

曽根崎新地の平野屋の小かんはもと武士の女で、煎餅屋へ嫁いでゐる

叔母の許に養はれたが、其の家の苦しい様を見るに忍びずして、自ら進んで身を沈めたのである。然るに実兄の帰参叶って、乳兄弟の男が迎に上って来て身請をして國許へ連去らうとする。小かんは鍛冶屋の職人平兵衛と深く契って居て且つ遊女に身を落した事を恥ぢて、内心では帰國を喜ばない。そこで平兵衛に身請を頼んだ。平兵衛は特殊部落から注文を取ってその金を工面しようとした。それが親方の怒に觸れて追出される。（以上が上之巻）

平兵衛は見窄らしい姿になって忍んで来た。小かんはそっと座敷の地袋の中に隠した。そこへ田舎の客、実は乳兄弟が買手となって来てそれと名乗り、最早身請も済したからと帰國を勧める。叔母もやって来る。平兵衛に添はしてやりたさに隨分奔走もしたが金の工面が出来ないと歎く。迎ひの者は國元の老母から小かんへの手紙を出し、情理を盡した説得をする。而して明朝同伴の約束をして帰る。（以上中之巻）

けれども小かんは男を見棄てるに忍びず、平兵衛と屋根傳ひに逃げて

北野の藍畑で心中する。その小かんが母の手紙を口に銜へて落命するあたりの酷さは到底筆舌に盡し得ない。

最も作者の苦心した所は中の巻で、武士の女が親元身請にも志を変へず、愛する男の為に身を捨てると云ふ所で、同じく美しい恋の犠牲者として掘き出して居る。此の作品には篇中一人として悪者が居ない。鍛冶屋の親方にも熟があり涙があり、叔母の態度にも申分なく、殊に迎ひの男の説得には何人も頷かしめられさうで、世故に長けた近松の説明を聞く思がする。小かんは情に篤いがさうで、世故にしっかり者で、平兵衛は熱情家でさて別に非難する点も見出されない元禄男である。依って此の作は唯の心中物と見做すべきでなく優れた作品であると思ふが、しかし、繰返し演ぜられた事もなく、歌舞伎に移された形跡もない。是はひよっとすると作中の特殊部落の事が差支へたのであるかと思ふが、してみると其れに依って當時此の人達の地位の低さや、金持であった為に劇場へ入込む者が多かった事を考へて見るがよく、武士の女の遊女勤めの如きは他に

いくらも例があるので、此は何の制裁を受くべき所はないと思ふ。當時六月朔日に正月の飾り物を下ろして来る習慣があって、遊里では此を『正月納めの祝日』と云った。彼等は此の日に心中をしたのであって、又物は剃刀であったが、見事な最後を遂げた。そこでまた正月と云ふ意を含ませて此の表題を附けたのであらう。

5. 生玉心中

正德五年はお初徳兵衛の十三回忌で、曽根崎の嵐三十郎座ではその狂言を出した。近松はその向をはる積りであったであらう。「曽根崎心中」に出る人達の名だけを改めて脚を多少複雜にしたとでも言ひ度い作を出した。これがその「生玉心中」で、從來の情死物に比して親の愛を寫し出してある点が特色である。

侠気のある一ッ屋の五兵衛の子嘉平次は、道頓堀に近い所に濱納屋を借りて茶碗屋の出店を出して居る。つい近くの茶屋町坂町の柏屋のさがは時折浜納屋へ泊りに来ると云ふ程の極く深い仲である。この嘉平次には家へ養女に来て居る従妹のおきはと夫婦にならなければならぬ義理合である。無理工面をしてさがに逢ひ続けて来た嘉平次は、五月の節句にたった一貫文の借錢に首が廻らない。長作と云ふ油屋九平次そのまゝの男があって、父五兵衛の店からある大名の大きな納物をさせるといって請取書を書かせそれを種に逆強請をする。これまでが上之巻だが、生玉の社の代りに天満の水茶屋を出し、さがが田舎の客に揚げられて居て嘉平次を呼寄せて逢ふ事にしてある。又そこへ嘉平次の姉が月の見えない弟を連れて来たので、嘉平次は駕籠の中へ隠れる。姉は様子を察してしんみりと意見をする。此の一條だけは「曽根崎心中」に見えない所で、見物をほろりとさせる。茲へ長作が来て爭論となり、雨中の闘合以下「曽根崎」通りの進行。

嘉平次は死ぬ覚悟でさがと二人で納屋の出店にゐると、父の五兵衛は

おきはを連れてやって來る。慌てゝさがを窓の外にぶら下らせた。父は散々に叱った末に、嘉平次の改心を喜び、酒一杯飲めとて腰の瓢箪から一歩銀を七八十から〳〵さら〳〵と注いで、これで諸方の形をつけろとおきはをつれて帰る。この時、腹を切ると言ふ父、尼になると言ふおきは、外で聞くさがの心苦しさ、嘉平次の當惑。こゝが此の作の最頂點である。嘉平次が泥に足の嵌ったさがを助けようと表へ出る所に、長作が荒くれ男を連れて來り、取組合の爭の末、今の金を掻浚はれる。一すもやらうかと追掛けようとするが人々に止められる。以上中之巻。　かくて嘉平次はさがを連れて生玉の社へ行く。柏屋の亭主等が探しに來たが二人は姿を隠して遂に馬場先で心中するのが下の巻である。

「曽根崎心中」に比べて劇的場面が一段と深刻味をもつ。さがの眞実さ、自分ひとりさへ死ねばと覚悟をしてのその物言ひ動作には、そぞろに貰泣きをされる。やさしいおきはのつらい立場、親五兵衛の強く言ふ裏面に溢れる許りの慈愛、正徳に入ってからの近松の世話淨るりには、

歌舞伎以上の人情味が籠って居る。中の巻だけは今も演じ出したら迎へられさうに思ふが、當時の世評はそれ程でもなかったか、歌舞伎の方へもとられなかった。恐らくは近松はこれに失望して、やはり人の馴染のある作がよいと思って、「曽根崎心中」に増補をしたのではあるまいか。

6. 心中重井筒

兄そ心中には何人かに對して面當をすると云ふ意が籠って居る。特に既婚者の心中物に於てそれが強調されて居る。而して兄に対しての面當は表題の此の作であり、舅に対してのものは彼の「心中天網島」である。

島ノ内六軒町の茶屋重井筒屋の弟徳兵衛は、内の抱のふさと契って居た。兄夫婦は此を察してさる萬年町の紺屋へ入婿にやった。徳兵衛は、ふさが大阪を去るか去らぬかの大切な金で、急いで京の親元へ送るべき金の調達を頼まれ、偽妻を拵へて女房の印まで捺して之を借りた。周旋人は此を隠居に知らせた。隠居は吸鳴り込んで來たが女房の機轉で丸く

納まり、徳兵衛は恥入って隠居の許へ詫に出て行く（以上、上之巻）。

女房が拵へて待つ生薑酒を飲まうか、ふさが拵へる朔酒にしようかと迷った徳兵衛は、つい六軒町へ足を向けた。ふさは飛禅の立つ最終の時間迄に金が届かないので、覚悟を極て剃刀を研ぎ出した。茶屋の女房見てとって、情理を盡してしんみりと意見をする。そこへ徳兵衛が訪ねて来た。ふさは茶屋へ招かれた。徳兵衛も急いで出ようとした。兄夫婦は怪んで家を出さず、二階へ上げて泊らせる。夜更け渡ってふさは屋根傳ひにやって来て徳兵衛と囁き話を始めた。聞きつけて兄が上って来たので、急いでふさを炬燵の内に隠す。兄は炬燵がぬるいと言って炭火をどっさり入れさせ、伊勢参りの長話をして容易に降りない。やがて降りた。ふさは烈火に性根も乱るゝばかり、徳兵衛もじれにじれた。兄を怨んで反抗の心を起した。（以上、中之巻）。両人はこっそり脱け出でて、道頓堀を後にして高津の大佛殿の勧進所に行き、徳兵衛の妻お辰が子供や丁稚を連れて探しに来たのをやり過し、女を刺殺して後自分は古井戸

に踏み外して落ちて死ぬ（以上、下之巻）。

「曾根崎心中」と同じく、一日一夜の出来事を仕組んだもので、進行の上に不自然な所もなく、よく纏つて居る。全体を通じては歌舞伎式のせりふに富むが、此が人形遣ひの上にも分業が行はれて居た事を告げるものらしく、活躍を示すには此が都合がよかったらしい。すぐれて居るのは中之巻の重井筒の女房が意見をする其條で、此の粋な意見は傳へて繁太夫節に於ても語った。此の心中の事実は何時か明かでない。寶永元年の三月廿九日だとも云ひ（「歳場年表」）、又十二月十五日の事とも云ふ（南水漫遊）。興行年代も「外題年鑑」には寶永元年四月十六日を初日だとしてあるが、作の内容から判断をすれば、少くとも四年の冬か五年の初の春にしなければならぬ。それでないと、道行の所にある役者の顔觸れが合致しない。年代はさうだが、近松自身は得意の作だったと見えて、宝永四年の「丹波典作」の終の所に「典作踊」と題して、此の作の節を略説して居る。享保に入っては歌舞伎でも此を取入れた。

7、心中天網島

近松の世話淨るり中第一の傑作と唱へられるもの。「翁草」の傳ふる所に據れば、住吉の酒樓に居た作者の許へ、昨夜網島の大長寺で心中があつた、早速帰つて仕組んで呉れとの使。近松は駕籠を命じて乗るや否や『走りがき謡の本は近衛流云々』と、道行の文から書初めたのだと云ふ。極めて短時日の間に脱稿したものらしい。當年六十八歳の作者は既に心中物を綴る事も十篇に及んだ。各々の作に夫々の特殊の構想を試みて來た。但し今度の出來事は、いとこ添の夫婦の間に子供が二人まである分別盛りの男が遊女と情死したと云ふのである。それには深い理由があつた事にしなければ見物は受入れまいと考へたのでもあらうか、これまでの作には嘗て見られない所の複雜さ、即ち治兵衛の女房おさんと遊女小春との間の女同志の義理の立て合ひを根柢にして、その間に叔母や兄の愛のこまやかさと妻のまめやかさと、又局面轉換の具に供した舅の

冷酷さとか、巧妙至極の仕組に描き出し、その進行展開の自然さは真に傑作と云ふに恥ぢないのである。

上之巻・河庄見世先の場に於ける劇的場面の深刻さよ。兄の孫右衛門が治兵衛の病根見屈の為に武士の姿に出立つて小春に逢ひ、小春は治兵衛の妻おさんよりの依頼によつて、自分だけは死ぬ覚悟で治兵衛は助けたいと云ふ心を底に隠しての武士との対話・立聞く治兵衛の『可愛や小春が燈火に背けた顔のあの脅せた事わい』の同情感激が、一には小春が、自分の死後の実母の惨状を思つて、治兵衛と次第に遠ざかつたなら、おさんの頼みの通り治兵衛の命に別條があるまい。又自分も死なずに済む事なら、と云ふ心の奥が口に漏れて、武士への頼みの言葉となり、遂に治兵衛をして『エヽ腹の立つ、二年といふもの化された。根性腐りの狐め、踏込んで一討か云々』と、じだんだ踏んでの念憤と変る。此のあたりの推移は、名優の口やわざを惜らずとも、情と景とは目前に髣髴とする。治兵衛の念憤は勝差の突込みとなり、居かずして武士に緊縛された

さへあるに、恋仇の太兵衛がやって来て、自由を失って居る治兵衛への汀襦となって潮は益々高まる。表へ出て来た武士の咎の下に治兵衛はからくも復報をなし、さてその武士が兄の假の姿と知っての後の悔恨は、小春と治兵衛との三年越の起請文二十九通の取戻しとなり、小春からの『中に一通女の文』此が一切の秘密の鍵だと云ふのだが、こんな変化に妙味とに富む趣向や場面は従前の作に皆て見られない所である。

『魂抜けてとぼ〳〵うか〳〵』と敍してある治兵衛には思慮分別は絶無である。その兄は人にも知られた粉屋の孫右衛門だけに、両親が治兵衛を酷愛するを見て、とうの昔に別に一店舗を開いて、生家は治兵衛にやって了ったものらしいが、これが思慮に富む男として実によく描き出されて居るし、為る事にも熱がある。

上の巻は小春が中心で、中之巻は妻のおさんが中心で、治兵衛は一切それに引廻はされて居る。中之巻では先づ阿呆の丁稚三五郎が子供を置忘れて帰ったのを叱る所に、おさんの利発できかぬ気性が十分に現はれて居る。次で実母や兄が小春身請の噂を聞いて、またも病の再発かと尋ねて来て、間遠だと聞いて心を休め、念の為と起請を書かせて帰るあたうも面白く、さて炬燵に治兵衛又ころり。まだ曾根崎を忘れずかと呆れながら立寄って、おさんは夫を抱き起し、炬燵の褥につきする。頻つく〴〵と打眺め、『あんまうぢや治兵衛殿』以下悲痛の言葉におさんの真節は遺憾なく表はされて居る。『左程心残らば泣しやんせ〳〵』其の涙が蜆川へ流れて小春の涙んで飲みやらうぞ』に至って最高潮に達する。然るに治兵衛は、不断の廣言に似ず、手を切って十日も経たぬに請出されるあの廣り女に未練はないが、あの太兵衛の悪宣傳が口惜しいのだ、と聞いておさんは興ざめ顔『ヤアウハウそれなればいとしや小春は死にやるぞや』と、義に秘密の庫が開かれて、俄に身請の相談。商費用の仕切銀を投げ出せば、もう手薄になって居る質種の有丈も投げ出して、どうやら半金も調達に行かうとする。そこへ舅五左衛門が躍込み、罵詈讒謗の有丈を盡して質種を奪取り、おさんを離縁させて連れ帰る。おさん

が連れ帰られたのは、哮り立つ父と争はず、一先づ立出でた後に、実母や孫右衛門と相談して無事に納める腹だったらうが　坊ちゃん育ちの力ツと逆せる治兵衛にはその真意が解せられず、舅への面當に曾根崎へと走つたのである。

懐にした金で茶屋の拂ひ一切を済した治兵衛は、深更に及んで、既に太兵衛に身請されて居る小春を連れ出して網島の大長寺で心中するのだが、治兵衛が小春の茶屋から出るのを待つ所へ、兄の孫右衛門が勘太郎を丁稚三五郎に負はせ、探しに来て、小春はちゃんと居るとの事に一安心はしたものの、『舅の怒みに我が身を忘れ、無分別も出ようか』とおろ〳〵涙で子供の行末を案じての獨り言。是を聞いて泣く者は物陰で聞く治兵衛ばかりではない。「生玉心中」と云ひ、「重井筒」と云ひ、又此と云ひ、心中の場に主人や兄が探しに来たのをやり逼して、一段見物にあはれを覚えしむる様に仕組んで居るのは、恐らく眞事実以上に出て居るのであらうが、此も軍に複雑化したと云ふ以上に、作者自身が己の

一族や子供に対する憂苦に支配されて居た其の心情のあらはれでもあらうか。

道行の文は前段との続き具合がしっくりとして居ない感じがする。最初是から筆をつけた為でもあらうか。小春治兵衛の二人が道を歩き乍ら此の世に残す親や子供を思ふ其の胸の内を描く事も、他の作にも見えて居て別にすぐれても居ず、おさんへ義理を立てゝ髻を切つて死場所を変へると云つたあたりは、反つてうるさく感ぜしめられ、理窟にすぎて、やはりいいのは見世先と炬燵の場である。

回顧すれば明治二十三年、第一議会に於て僅に八千万円の總豫算に対してまさに一割の削減をなすべしと喧擾を極めて居る時、坪内逍遥氏に依つて試みられた此の作の評釋は、誠に委曲を盡して居るものであつた。七年を経て同じく三十年、早稲田近松研究会第八回に於て、諸家の意見も開陳された。（抱月・宙外・操山・渋川・不倒等）、爾来茲に三十餘年、儒学好事の人に依つて、此の作に対する批評と讃美との聲を聞くが、

先人未言と聞くものは少いかと感ずる。作者近松が性格による破綻と云ふが如き悲劇構成の原理を體得して居て、それが別に工まざるに筆端に現はれて此の作を成したとすれば、正に以て天才である。又彼の戯曲化による事少くして、事実が此の作に近かったのだったのなら、天は幸を此の操芝居に恵んだ事にならう。惜しい事に眞事実を記載した文献がない。両人の墓所であった網島の大長寺さへ、藤田家の御下屋敷に買收されて、二人の墓も外へ移された今日に於ては、彼等に対する追憶のよすがさへ失って了った。延紙の書置ももとより疑ふべきだと云ふ。されば われ等はつまらない事の詮議をするよりも、寧ろ、此の作を味って見るが何よりであると思ふ。

事の展開と結末とは言ふ迄もなく彼等両人の性格によるのであらうが、彼等をして此の事に出でしめた最大原因は抑々何であったのか。女の意の侭に妄動する男は、女にとっては可愛い人である。これは妻にとっても遊女にとっても同一であらう。とりわけ水商賣の者達は人の意志に従

ふ振をして日を送るが常であれば、わが意の慾に動かうとする男を愛するのは理の當然で、治兵衛は正にその愛せらるべき男であった。これが第一根源であらねばならぬ。第二には治兵衛が冷酷な舅に対する面當である。既に作者が孫右衛門の口を借りて『舅の怨みに我が身を忘れ』と言はせて居るにも拘らず、諸家はこれを軽視して來たのである。更に第三の原因は、小春が遊女生活の末路を見通して居たであらう事を、諸家は見逃して居ると思ふ。比較的理性に富む彼女が、金に自由な太兵衛に対しての反抗で、治兵衛に同情を寄せたと云ふには同じ難い。世に小格子の遊女程あはれな者はないと云ふ。泥水生活をする者に何人か悲痛な事情を伴はない者があらう。殊に南の風呂の有人から曽根崎へ鞍替をした小春にあっては、それが借金の返辨に苦しんだ結果である事は言ふ迄もない。その金に窮した小春が、金に窮する者に同情して、金自慢の太兵衛よりも、店の仕切銀にも窮する、いやそれは責任せにして夢中になって通って来る治兵衛に我知らず愛着を感じて、遂に身も心も許した事

は理の當然であると思ふ。私は又更に思ふ、太兵衛も假設の人、而して
もう一段深い理由が存在すると。それは遊女の末路である。白粉紅脂に
身を飾り嬌笑を事とした遊女が、年果てゝはお針か遣手か、よくて小店
の世話女房。それも百人に一人か二人であり、大概は治し難い性病を身
に抱いて醜い姿となって人に忌み嫌はれて、陋巷に窮死する。それを見
聞して居る遊女、殊に小春の如きひきしまった心の所有者には忍んでも
身に受け難い醜体であったらう。そんな目には會ひ度くないと云ふ心が
彼女に死を選ぶといふ大決心をなさしめる一大原因であった事を考へざ
るを得ない。けれ共近松は、どの遊女をも皆美しい恋の犠牲者として居
るので、彼等と客との間の愛の成立事情も説かず、その経過を説く事も
極めて少く、忽ちに破綻の直前の窮境から描いて居る。此が戯曲と小説
と相異る所とはいへ、一には此の人の遊女観が多大な同情の上に立つ結
果と見るべきであらう。その為に自己の未來を打算して男と共に死ぬと
いふが如き見方は忍んでも為し得なかった結果であらう。美化は詩人や

画家にのみ許されて居る事、解剖摘抉は批評家の任務、鑑賞はそれ此の
中間に立つものか。以上三つの何れを取るべきかは一に諸君の心に任せ
て、轉じて此の作の後世に及ぼした影響を説くであらう。
「天網島」は誰が見ても傑作に相違ない。然るに京阪にあっては歌舞
伎にも此を取入れず、操り芝居に於ても反復しない。別に官權からの制
裁もあるべき筈もなく、遺族からの苦情があったらうとも思はれない。
或は人形遣ひが此の作を為生かす事の困難だった為に反復が出来なかっ
たのであらう。江戸ではちがふ。翌享保六年森田座に於て二代目團十郎
の治兵衛、袖崎三輪野の小春で出したがさう繰返されたとも見えない。
而して五十年といふ長い年月を経て明和六年に至って初めて、三好松
洛・山本嘉藏の筆で、「小春治兵衛中元導掛鯛」と云ふ題目に綴って演じら
れた。山崎ノ段・八百屋ノ段・夢路の千日参り、醤油屋段などで散漫極
りなき劣作・紙屋を醤油屋に変へ、小春の父は盲目で尺八の指南者など
とし、元來お十夜の出来事をお盆の事にし変へるなど惘れかへる程の愚

作である。

これより九年を經て安永七年、近松半二・竹田文吉の二人に依って「心中紙屋治兵衛」が出された。是は改作と云ふ程度のものであった。今演ずる河庄の場は此の作の一條を繰返すのだが、二人の者が今死ぬといふ危い所で助かるなんどとは追善物の常型で、如何に曾根崎の芝居で演じた為とは云へ、賛成の意は表し難い。

後れて文化七年、北堀江座で演じた時か、十一年に道頓堀で演じた時か、それとも文政に入ってからか「増補紙屋治兵衛時雨の炬燵」が出た。此の作では、おさんが尼になり、舅も実は底に実意を持って居た事にし、治兵衛に太兵衛を殺させるなんどと、まるで「曾根崎心中」の増補の拙劣極まる二の舞の如きものである。今演ずる「時雨の炬燵」はこれだが、こんなものより寧ろ原作の方がずっとよい。われらはこんな類よりは繁太夫などに於て原作にほんの僅かばかりの筆を加へて語り傳へて居る方に深きあはれを感ずるのである。

三、素人同志の情死

心中は通じて相愛遂行の結果に外ならないのであるが、此の遂行を妨げるものは、遊女関係の場合にあっては恋敵の身請であり、それでなければ他の事情に依る別離の憂に堪えられない結果である。何れも男に金の工面がつかなかった為で、その為に金中だなどとも呼ばれた。素人同士のは必ずしも金が敵ではなかったが、内證の苦しい町人にあっては、娘に因果を含めて貸方へ縁附ける事もあった。此の際、女に愛人があって、それと別れるに忍びずして情死すると云ふ事も正に有り得べき事で、近松が宝永五年、五十六歳の時に綴った「高野山女人堂心中萬年草」（宝永五、四、一六、竹本座）はこれであった。

又、別に金銭上の関係はなく、別れるに忍びないで死を共にする者もあった。最も世に此が多くて痴情の果だと言へばそれまでだが、一面から言へば純なる恋の遂行者である。然しそれだけでは葛藤も紛糾も少く

て劇に仕組むには物足りない。そこで近松は此の類の事件は一として材料に用ひなかつたが、唯一つ、男は前髪をとつたばかりの二十一歳、女は五つ年上の二十六歳で情死したもの、それも同じ店に仕へて居た奉公人同士だと云ふ変りものだけを採用した。それが「今宮心中」（同七、正、二三　竹本座）である。

以上は共に未婚者の場合であるが、既婚者殊に夫婦心中にあつては必ず家庭の不和に基く。それも入婿又は養子といつた場合により多く生ずべきで、近松の材としたものも亦それであつた。これに二つの作があつて、一つはお亀與矢衛の情死で、女だけが絶命し、男はおくれて一年後に跡を追つた。近松はわけて「ひぢりめん卯月の紅葉」、「あとお卯月の心中」（潤色）の二篇としたが、連作と見てもよく、他の一つは近松が最終の世話浄るり「心中宵庚申」である。以上五つの作は遊女関係の物以上に、死ぬより外に取るべき道がなかつた様に十分の同情を寄せて仕組んである。恐らく地下の霊も見物の人も満足した事であるべく、これが當代の

事件を仕組み乍ら官權の制裁も受けず、世間からの苦情も出なかつた所以でなければならぬ。

1. 高野山女人堂　心中萬年草

高野山南谷吉祥院の小姓久米之助が、麓の紙谷の宿の雑賀屋英次右衛門の娘お梅と女人堂で情死した事を綴つたものである。恐らく近松が高野山詣でをして得た材料であらう。山の名物や紀景等が到底机の上や、また聞きで生み出したものとは認め難い。

久米之介はもと武士の子であつたが、鶏合の争から相手を殺したので、山へ送られ、ゆく〳〵は髪を剃つて其子の冥福を祈るべき身の上であつた。それがお梅から送つた手紙の封じ違ひから不身持が暴露して、大雷雨の中に山を追出される。ここまでが上之巻で、兄分の祐辨律師の怨みの言葉が切実哀愁を極めて居る。書起しは播州飾磨の城主が母の墓を奥の院に建てると云ふので、代参の武士が吉祥院へ上つて來るが、それが

久米之助が殺した子の兄で、折節久米之介が山を追はれる事になり、さては容赦がならぬと立會を求めて刀の背打ちだけで許すと云ふ事にしてある。勿論劇的場面構成の必要からで假説の事に相違なく、お梅の兄の低能なのがやはり小姓になつて居て、阿呆な文句を吐き續けて見物の笑を喚び起す樣にしてあるが、是も後に愁歎場を出す為の準備で、その実を言へば、道化役者も出さなければ用の無い人が出来るのを防いだのである。

中之巻。山を追ひ出された久米之介が、お梅と共に雑賀屋の二階に居ると、今夜お梅と内祝言の盃をする事になつて居た京の織屋の美濃屋作右衛門が吹鳴り込んで來た。それは山で一切の事を聞いて來た、お梅の首を渡せ、貸した金の二十八貫目も返せと言ふのである。其次右衛門も一國者、お梅に落度のある証據を出せと大爭論、女房が仲裁に入つて、夫を宥め婿を賺し、二階の二人に早まつた事をするなと説く。此の場の割口説は親の愛と世間の義理とを曲盡したもの、ともかくも盃をしての

事にと納まつて、お梅が二階から下りれば、作右衛門俄に笑顔を作つて直に二階で床盃をすると言ふ危さる。其知に積んである夜具の中には久米之助が身を隠して居るのである。作右衛門に醉の廻つた時、祝の石打に燈火は消えた。その闇の中に久米之助はお梅の母に導かれて外に出る。お梅が一緒とは知らず、是がお梅の飲んだ盃、是をやるからもう逼ぎしの事は諦めよと、母が言ふあたりは、技巧と云へばそれながら一つの結びとなつて力がある。中之巻はお梅の母が中心。石打は夫婦一家相談の機智で、近松は恐らく此の珍しい風習に興味を抱いて、此の仕組を立てたものらしい。下之巻の萬年草の生死ト定の事もやはりそれで、何れ皆高野詣での土産話と解したい。

下之巻。十九歳の久米之助、十七歳のお梅は逃れて女人堂に辿り着けば、堂内には久米之助の姉が家來と共に、父の骨を携へて上つて来て居た。問答の間に此事が知れ、姉は萬年草で久米之助の生死をトつて、死ぬ徴が見えたと語る。是も彼等に死を勧める事になつて、お梅が母の呉

れた盃を懐にして縁の下で久米之助の刃に掛かれば、妙主従は驚いて蒐の方に走り、久米之助は咽を突いて父の骨桶の上に倒れて死ぬと云ふが終結。

総じて寂しい作。見物に共鳴を呼ぶべき大阪町人の生活の描寫もなし得ないので、近松が之を補ふ為に十分に努力した事は、その構文の上にも強ひて諧謔弄して居る所に窺ひ知られるが、餘り受けなかったかして正本の遺存するものは極めて少い。按ずるに此作の演ぜられた宝永五年は竹本座の主要な地位に立つ者に何か事件があったかして、正月以来何の興行もせず、四月半ばに至って、昨年出した「酒呑童子枕言葉」の三段目までを出し、切に此作を据ゑたのであった。而して間もなく奈良から伊勢にかけて旅興行に出た。享保四年に至って京の夷屋座で「高野山女人堂心中萬年草十三回忌」（二番續。作者安達三郎左衛門）を興行した。外題には斯くあっても原作とは離れたもので、大和の下市の久宝寺屋次郎兵衛の娘おつねは宅角餘所からの結婚の申込を喜ばず、かねて契って居る

手代の平介と女人堂で心中すると云ふ筋である。尤も平介の行方を知らうとして萬年草を水に浸す所もあり、平介がもと山で小姓をして居た事にもしてあるが、お梅久米之助の行き方とはまるで遠った作である。何年忌と外題にあるものには、宅角原作と離れたものが多い。此時のおつねはむぎのハ重桐（荻野トモ云フ）、平介は座元の大和山甚左衛門、次郎兵衛は実道化の大島嘉十郎で『八重桐大和山大當り』と題して居る。浄るりの方ではずっとおくれて明和八年に至って、竹本三郎兵衛に依って「お梅久米之助角額蛇柳」が作られて、蛇柳の俗説など交へて散々な拙劣なものにして了った。稍おくれて京の布袋屋座で、安永の頃、これを新萱道心の狂言に綴り込んで「萬年草妹背振袖」と題して演じた。江戸では宝暦四年四月、市村座で「我衣手蓮曙」を出したが、蓮生坊も出ると云った仕組で原作に離れたものであった。ついで天明八年正月、桐長桐座に於て「おくめの介世嬰雪解」常磐津文字太夫連中、おむめ、岩井半四郎。久米之介、瀬川菊之丞。で演じ、ずっとおくれて安政四年

市村座で富本の地で「時鳥酒杉木」と題して出した。何れ近松の作とは離れて跳りに都合よく仕替へたものばかりであった。

2. 今宮心中

是は外題の示すが如く大阪の出来事であって、本町二丁目の新物屋菱屋四郎右衛門方に傭はれて居るおきさは、歌祭文が巧みだと云ふ洒落者。手代の二郎兵衛は五つも年下だが、これも心中物を上手に語ると云ふ同好者、いつしかよい仲になって居た。此のきさを、外に蹤蕩を分けて貰って居る由兵衛が、女房にと心掛けて居る。一日此の由兵衛が主人の一族を川舟遊山に招いて居ると、きさの在所の父が餘所へ縁附けるとて暇を貰ひに来た。きさは呼ばれて川舟へ行ったが、大阪に住みたいから父を説いて呉れと頼む。隠居の貞法は父を諭して、主人次第に縁付けると云ふ証文を由兵衛に書かせて印を捺さした。父は無筆者故、由兵衛は勝手な事を書いたらしい。納屋の内から此を見た二郎兵衛は一大事だと思って石を打ちつけて逃げた。由兵衛は舟から上って誤って浪人を咎めて却ってその奴に散々に踏付けられるなど、人形の見せ場があって上之巻は終る。

遊女物と違って、廓場がないので陽氣な所を缺く。そこで作者は大序に役者評判の讀賣屏賣雑波婆者の風俗を橋々名所に擬へたものを描いて、その穿って居る所に喝采を博さうとしたり、「心中萬年草」の石打までを利用して、務めて複雑にと力を致して居る。きさはもとよりおやま人形遣ひの使ふ若女形、二郎兵衛は立役、由兵衛は面の憎態な敵役。隠居の貞法は花車方、在所の父は親父方。浪人は言ふまでもなく老立役。浪人の奴は恐らく道化方。此の複雑は今も言ふが如く、一座の者を遊ばせない為であって、如何に歌舞伎のそれに接近して来たかゞ知られる所。

中の巻は菱屋縫物の場で、二郎兵衛がきさに耳こすりを言って居る。そこへ盲の主人四郎右衛門が来て、二人の者に灸治の手傳をさせる。ここでも痴話繰った末に、彼の母での手形を盗まうと、主人の巾着から鍵

を取出し、戸棚を開けて、その手形を破った。そこへ由兵衛がやって来た。二郎兵衛は戸棚に隠れた。由兵衛は戸棚に錠を卸し、その場できさを手込にしようとして、散々に道込められる。此の戸棚は歌舞伎の方ではよくやる事で、浄るりでも「氷の朝日」の蒸返しであるが、見物をひや〳〵させる高潮点、由兵衛がわめく聲に四郎右衛門はきさを請人の婚夫婦に預けしめる。貞法は二郎兵衛を戸棚から出して、きさを由兵衛に譲れと説得し、舟の手形はとうに破って棄てたと言聞かす。二郎兵衛は驚いて彼の証文を見れば、しなしたり家質の手形、るはや生きては居られないと忍び出る所に、下女が裸で蚊を焼くなんどと「曽根崎心中」の蒸返しがあって、漸く門口に出れば、きさが表に来て待って居た。吠立てる犬に、下男が起きて門口を開けた隙に、両人は手をとって今宮を指して行く。

下之巻の道行の文は、當時の流行であったと見えて、数へ唄で綴り起してある。愈々夷の森に着いて、きさが年下の男を唆して殺したと言はれるのがつらい。何ふ十五年間の辛抱に、老女房の御蔭には家まで買ったと言はせたかったと歎くあたり、二郎兵衛が年がゆかないだけに気を落して、松の木にも上りかねるのを、きさが勵まし、男は此の片足の足袋は旦那のお古、勿体ないと脱ぐあたりは、見物をして袖を絞らせたであらう。大雷雨の中に、持出して来た日野絹一反で二人が吊下った形は正月門松に掛ける掛鯛にも似て居たと言ふので、掛鯛心中とも呼ばれた。いつもの双物にならず、二人が縊れ死んだのは『これ心中の新物と、聞く人同勾をなしにける。』と筆を結んでである。

此の作は大阪町人の主従関係を演出し、殊に隠居の貞法が子飼からの二郎兵衛を労る所に、見物の歓迎をかち得たであらう。茲が最も情味に富んで居て、宮古路豊後掾の「加賀菊妹背中酌」にそのまま用ひてある。冬据の場は古くからあるへ多く戒めの場に使ふ）事乍ら、相思の男女二人をそれに使ったのは新しい。而して両人が主人の鍵を、取れ、いや怖いと云ふ素振は大に受けたであらう。後年近松半二の作「新版歌祭文」

に於て、お光久松発端の條に借用されて居る。

此の全事実を材としたものは、正徳二年豊竹座で興行した「今宮心中丸腰連理松」歌舞伎の方面では、享保五年三月、大阪の角の芝居で、藏三右衛門が座元の中の芝居でも出した。是等は十三回忌の追善といった意味であらう。

3. 與兵衛おかめひぢりめん卯月の紅葉

歌舞伎芝居の御家騒動物を縮少して町人の家庭に移し、結末を破綻に終らしめたとも言ふべき作である。情死をした者は古道具屋の一人娘お竈當年十五歳、相手は聟の與兵衛二十一歳いとこ添。主人には妻がなくて妾のいまと云ふが同居して居って、與兵衛と折合が悪い。又、いまの弟に傳三郎と云ふ悪者があって、其家の家督相續の譲状は自分の名宛になって居ると詐った。敷金十貫目を持って来て居た與兵衛は驚いて、町役所から其の譲状を取出して姿を晦ました。譲状には與兵衛を名宛人にしてあった。これが破綻の主因となり、終に若夫婦は心中への道を辿るのだが、年若なお竈がしっかり者で、いつもアクティヴの地位に立つ。此頃の小娘や年若の嫁達は、芝居の女形や廓の遊女の振なんぞを真似るのは最早古風だと言って自人風に真似る。と作者は大序に断って居り、妾のいまも『若い姿してびらしやらと』と罵って居るので、お竈も何れ當世女であったに相違ないが、近松は飽くまで夫に殉ずる可憐な女に寫し出して居る。與兵衛は唐物屋家さへならぬ程にぞべ〳〵と着飾って、謡講の能諳のと出歩いて、茶屋入りもする元禄男。これでは朋前蚤掛けて一代に身上を作った舅長兵衛の気に入る筈がない。此の新旧衝突も不和の一原因で、加ふるに横紙破りのいまと云ふ健者が事々に悪舌を振ふのである。悲劇は生れまいとしても生れ得ずには終らない筈である。

近松は是を上中下の三巻に綴り分けたが、上之巻ではお竈が、家出をした夫の身の上を案じ、廿二社めぐりをし、天王寺口寄巫女の所で夫の

生口を寄せる所から始まる。此の生口に共矢衛の窮状が告げ知らされ、折よく共矢衛が通り合せて二人が喜ぶ間もなく、父の長矢衛がいまを連れてやって来た。而して共矢衛の懐中から讓状を奪ひ取って読んで聞かせ、その足で在所に行けと命じて去る。

中之巻。お亀が父の長矢衛と若井半四郎座の鳥辺山心中の狂言を見て、どうせ死ぬなら二人で死にたいと思ひ定めて、共矢衛の同意を得たので、死装束の白無垢を纏って居る。幸ひ家人が居なかったので共矢衛が立寄ると、盲目の伯母がやって来た。共矢衛は店の賣佛壇の中へ逃込んだ。その前で伯母はわが身の不幸を物語り、死んでも本當に泣いて呉れるのはお前達二人だ。と心を籠めての話に、共矢衛もまろび出で泣いて伯母に感謝する。伯母は懐中から古渡りの縮緬を取出して共へる。そこへ長矢衛が立帰る。共矢衛は裏へ抜けて土蔵の中に隠れた。とは知らず無用心なと倉の戸を閉め錠おろして出て行く。共矢衛は退屈して、水甕の根付で天火を導いて火縄に移し、煙草に憂さを晴して居る。お亀が早く

壁を破って出よ、二人で立退かうと言って居る所へ、傳三郎が来てお亀を手込にしようとし、共矢衛が出て来て掴み合ふ。その最中に長矢衛や手代が帰って来た。共矢衛は火縄の言譯が立たず、黄昏時に追出される。かのお梁久松の趣向の借用ながら、見物をはら〳〵させる見せ場。さて夜更けてお亀は書置をし、帯を窓に結付けて傳ひ下り、共矢衛と共に梅田堤に向ふ。茲に縮緬で白帷子を吊下げる事もあり、夜番に見附かりさうになって、表にある車長持に隠れるなどの技巧は十分に見せてある。下之巻は、夜明方になってお亀は剃刀の疵によって死んだが、共矢衛は人に助けられて行方を晦ます。

興行年代に就いては、「外題年鑑」に宝永四年四月廿一日が初日で「今川了俊」の切に出したとしてあるが、鳥辺山心中が半四郎の座で興行されたのは宝永三年の夏であれば、此の作も三年の興行と見るべきである。外題の縮緬の由来は分るが、文のうち『今日は五月の十七日』と云ふ句もあり、最後の所にも『時も皐月の菖蒲咲く沼の泡とぞ消えにけ

る』ともあるので、「仰月紅葉」といった意が解しかねる。

4. 心中仰月の潤色

與兵衛は助けられて、大和の平群谷の大念佛派の庵に住んで居たが、お亀の一周忌の来る一月前に剃刀で見事にお亀の跡を追うた。到底上中下の三段に仕組むだけの材料ではないので、近松は、前作の下之巻に少しばかり筆を加へて上之巻とし、中之巻には長兵衛が伯母や妾やその弟などと、與兵衛を河内の親元へ預けての帰途に、天王寺の巫子の所へ立寄る事に書延してある。伯母がお亀の口寄をすると、お亀はいま兄弟を怨んだ末に『心中の作法にて、死損ひし片々は試物になると聞く』が、我々は面々旨害をしたとも云ふべく、心中の外の心中ぞやと言って、與兵衛を出家にして一命を助けてくれと言って帰って行く。盲目の伯母は夜で散々に長兵衛を打擲し、長兵衛は懺悔をして、此の上は與兵衛の命を助けると言って詫びる。

與兵衛は墨染の衣を纏ひ、名を助給と改め、庵に住む身となったが、同宿の者が石山詣でをした留守に、お亀の幽魂が在りし姿となって駕籠で訪ねて来て、積る思を細かに述べ、助給が釜の下へ焚付けようとして打つ石の火に、あら暑つやと言って已の位牌の中に消えて行く。助給はさては中有の闇に迷うて居るか、さらば急いで跡を追はうと書置の筆を執った所へ、同宿の者が帰って来、伯母より託された数々の贈物など渡して寝る。與兵衛は伯母から贈られた白縮緬の紙帯をお亀の位牌に結びつけ、端を我が左手にしっかと絡み、剃刀で見事に咽喉を突いて死んだ。近松の才筆は時に洒落に陥って哀愁の気分を殺ぐが、此の中之巻だけは人の涙を催させる。下之巻は即ち書置の文章で、繰り古道具の縁を辿って所々戯謔に堕し、これでは見物の涙は笑に消えて、お亀も助給も浮ばれさうに思へない。自然近松の失敗とも認めたい所だが、此の如き場合には、人形とは全く没交渉であればこそ、定めて見物が飽きくした事であらう。何れさう受けなかった事が想像される。

享保四年に至つて都萬太夫座の顔見世狂言の切に「道具屋心中」と題してこれを出したが、家老の子の喜左衛門がお亀に横恋慕をすると云つた筋に替へて居た。浮るりでは天明三年に竹本座で「増補道具屋お亀」と題して出したが、作者も不明であり、作意もひどく下劣なものであつた。豊後節の方ではずつと後の天保元年に市村座で「おかめ共兵衛色直肩毛氈」（常磐津連中）を出し、元治元年にこれを繰返した事がある。これは素語り物として古老の間には知られて居た。

5. 心中宵庚申

前の作は家附の娘の婿養子との心中であつたが、これは養子とそれに迎へた嫁との心中で、原因は一切姑の邪慳嫁憎みにある。養子と云ふは大阪の新町油掛町の八百屋の半兵衛の事である。もと、遠州浜松の藩中の山脇氏の子であつたが、十二の時から此の八百屋に養はれてもう十六年にもなる。妻のお千代は伏見の近くの裕福な百姓の家から来て居るが、縁運が悪くてこれが三度目なのである。それを、半兵衛が親の年忌参りに国へ帰つて居る留守に姑はお千代を離縁した。とも知らず半兵衛は帰途に伏見に立寄り大いに驚き、折節病褥にあつた妻の父や姉に百方陳謝して大阪に連帰り知辺の許に預けて置いた。此の養父母の甥で掛人になつて居た者があつて、これが夫婦に同情して邂逅の仲介者となつて居た。姑はこれを探り知つて口汚く罵立て、半兵衛は『女房の親と我が親と世間の義理と恩愛と三筋四筋』の退引ならぬ場合に立至り、姑の名を立てない為にお千代に離別を申渡し、四月五日即ち宵庚申の晩に連立つて生玉の大佛殿の勧進所で毛氈を敷いた上で潔い最期を遂げた。二首の辞世の歌が残してあつた。そのお千代の腹には五月の子が宿つて居たと云ふ哀れな話である。

此の心中は享保六年の出来事であるが、その一周忌に當つて、先づ紀海音が「おちよ半兵衛心中二つ腹帯」と題して三段物に仕組んで豊竹座でこれを興行した。竹本座では十六日後れて同月二十二日から近松の此の作を

出した。全く両座の競争で、後れて出した近松には三分の損がある。而して此の作だけは海音が作り勝ったと言った人もあるが、人情の委曲を盡した點では近松の方が數等の上にある。

近松は上之巻に於て、汐松に帰った半兵衛が、長年の町人生活にも武士の魂を失はず、弟への家道の問題に対する取捌きにも田舎武士の及ばぬ所を示し、中之巻のお千代の親里の場では父子妹夫婦の情愛を描いて此の人ならではと三歎せしめ、下之巻では口汚い姑が嫁を夫去りにすると聞いての態度の豹変・談議好きの好人物の舅。夫婦が最後の場の愁歎。半兵衛が武士の出に恥ぢない切腹等、描き出して切実巧妙を極めて居る。

近松の世話淨るりは何れを向はず三段物は、その中之巻に主力を用ひて、人情の極致は茲に示す事にし、道行には舞文の妙を発揮して朗朗誦すべき辞句を連ねるのであるが、前の「卯月の紅葉」には古道具に縁を持たせ過ぎ、その弊は一層此の作に於て現はれた。その為に切角見物の

心に寄せ来った美しい悲しみは、洒落や言ひかけの為に、又も笑を催さしめられた事と思ふ。然し乍ら道行だけは人形で見せるのは容易でなく、太夫の節ことでもたたなければならないので、語り手からして作者に向って此の種の遊戯文学に近いものを求めたのでもあらうか。何となく効果を殺ぐ憾みがあると思ふ。今も上方芝居には悲しい場面に一寸笑はせる事が多い。古く近松の作にそれがあって、傑作「天の網島」にもそれを出してあるが、今のわれらから見ると惜しい様な心地がする。とは言へ當代の見物の教養の低かった事を思へば、こんな洒落に近い道行が却て喝采されたのではないかと云ふ疑も生じて来る。兎も角淨るりや歌舞伎の脚本は決して一讀しただけで評を下すべきでない。

近松の此の作は拙作と云ふではなく、七十歳の時の筆だけに老熟は遺憾なく現はれて居るが、上之巻に決松の國侍を描かうとして、べい言葉を用ひしめたなんどは噴飯に値する。かの吉原の高尾を寫し得なかった と同様、関東の記事は全く不得手。此の點が彼の短所であった。又半兵

衛が何故に町人に養はれたかにも筆は触れて居ない。海音は剛難の相がある為だとして居る。蓋し近松は中之巻に於てお千代の父の深き愛情と半兵衛の武士気質の失せて居ない事を寫し出すのに務めたのであり、海音はお千代の親を貪しいものにして、養父母の甥の同情の深さを描くのに力を致して居る。両作者の目の附け所が透って居た。共に実事物語に基いて想を構へたものらしいが、天分の差は如何とも為難くて、情理の曲盡は近松が数等上に居ると評したい事は前に述べた如くである。

因に云ふ、作者は筆の上で善悪の顚倒位は平然として之を行ふ。此の心中も西沢一鳳の「傳奇作者」に據ると、八百屋の姑婆といふは遠も殺さぬお人好しで、舅の伊右衛門も悪人ではないが、女癖が悪くて下女や傭女にも度々手を出し、嫁のお千代をも口説き立てたと云ふ。殊に半兵衛が決松へ出た後の附纏ひ方は見て居られない。姑は嫁を親元へ頼け、世間に対しては嫁の身持が家風に合はぬと言って居た。半兵衛は帰り刻々呼戻したが、老父はなほも不倫の慾を捨てず、半兵衛の小過をも罵り立

てて、家庭は常に風波が絶えなかった。そこで半兵衛は一應千代に暇を出し、宵庚申の晩に二人で心中したのが眞事実だと記し、淨るりに書く時には姑を悪人にしないと憎さがまさらないからだらうが、近松の作意に依って善人が悪人にされて了った。姑の不幸と云ふものだと附加へて居る。又、「浪花人物志」には養父の死後、姑が手代と情を通じ、その手代が又お千代に想をかけて半兵衛を追出さうとしたので、揉事が絶えず、それが原因で死んだと書いてある。どちらも善悪が顚倒して居る。若し西澤の説く所が事実であるなら、近松に対してでなく海音に対しても、姑の関係者から抗議が出づる筈で、近松にだけかれこれ苦情を言ふべき筋合のものでない。それとも姑は能に死んで、舅は己の醜行が暴露されなかった事に満足して口を噤んで居たのであらうか。それならば狸爺である。云傳ふる所に據ると、抗議は出た。蔦象亭の「反古籠」にある話だが、豊竹座では大入であったので千日寺に墓を立てて供養をした。八百屋は大いに怒って夜、その墓を芝居の木戸前に移した。表方は取除

けゞうとしたが、座元の豊竹越前少掾は却て景気になると其儘にさせて置いた。これが又評判になって益々入りがあったとの事。これでは抗議ではなくて翼賛になったと云ふべきである。

何れにもせよ、死んだ夫婦には十分同情すべきで、大阪の中の芝居の竹島幸左衛門の座でも直ぐこれを仕組んで「新版宵庚申」と題して興行し、夏には京の嵐三十郎座でも「八百屋心中」と題してこれを出したが、それは海音の作を移したものであった。江戸でも此年中村座で「花毛氈二腰帯」と題して出した。浄るりでは寛保元年五月、豊竹座で「青梅擇食盛」と題して少しばかり加筆して再興行をしたが「宵庚申」の方は長く出なかった。江戸の所作事には此の心中を綴ったものが常磐津に四曲、富本に八曲、清元に一曲あるが、それも近松に據ったか、海音に基いたか、俄かに定め難いが、總じては先に出ただけに海音の方が採用されて居るらしい。男の同情と諫言を描いた所が優れて居た為らしいが、先輩を着ける事の大切な事は此の一事でも知られよう。学説にしてもそれで

ある。

四、女道物

江戸幕府時代に於ける女子の制度は極めて賢明な政策であったが、同時に不人情極まるものであった。妾を蓄へ得た大名や高禄の士には別に苦痛でもなかったであらうが、身をつゝましやかにして初めて衣食し得る小身者にあっては、その妻に一年とか二年とかの空閨を守らしめねばならなかった。我が國では上古以來貞操を女にはかり強ひて來て一夫多妻が認められてゐた。同情すべきは空閨を守らなければならぬ境遇に立つ人妻である。制慾の力は男より女が強いといへば、或は男の想像する程でないかも知れないが、体質と境遇とによっては時に貞の道を踏み外すせも生ずべきである。

近松は此の方面から材を求めて三つの作を出した。その二つは、殿の供をして夫が在江戸時代に起った武士の家庭の出來事、他の一つは町人

の家庭に起った事で、これは夫婦同僚の間の出来事である。「堀河波の敵」

「饑の産三重帷子」は前者を「大経師昔暦」である。

当時女敵討といって姦夫を討取るのを以てせめてもの面目保持とした。此の場合には姦婦にも非は誤せられた。姦通は決して江戸時代に起ったものでなく、これも有史以前からであろう。従って女敵討と云う事実も古くからの事だろうが、此の言葉の出来たのは室町末期からの事らしく、盛になったのは江戸時代に入ってからである。たしか伊達政宗であった

か、或る武勇の士を他に世話するとて、此の者に女敵討を願出るほどのうつけものには御座なく候と書いてやったという話がある。女敵討は武士に限られた事であるが、何にしても家事不取締の結果であり、それが

概ね小身者の事にのみ禁令が要求せられた結果であって見れば、また衆の毒の感に堪へないのである。此の不貞事件はおそらく所在に起ったのであろうが、世禄保有を第一として何事も穏便にと云う時代であれば、多くは荒立てて女敵討の届出までにはならなかったらしい。但しあまり

に世評に上ってしまった場合、姦夫が武勇者である場合又は實夫が武勇でない業で禄を賜って居た時には、此の挙に出ない時は卑怯だと認定されねばおそれがあった。そこで強ひて尋ねて討果さねばならなかった。助太刀の如はたなどは賞めに事ではないが、腕に覚えのない人の

は口では恨んでも心で感謝して助太刀を求めたらしかった。近松の二作はどれもこんな場合に属する材を仕組んだものである。

1. 堀河波の敵

寛永三年六月七日、京の祇園會の朝、因州鳥取の藩士大瀬彦八郎が女敵宮千博右衛門を下立賣通堀河の住居に踏み込んでこれを討ちとめた事は「月堂見聞集巻二」に出ている。彦八郎は敵の顔を見知らなかったので、弟文七、妹くら、妻の妹ふうが同行した。姦婦は出発直前に刺殺して来たのである。

此の事件を材としたものは、小説に「京鹿子娘道成寺」（寛永三年八月刊）、森本東烏著）があり、「熊谷女編笠」（同年九月刊。端文流著）がある。

後者は事実を顚倒してあるが、前者は專ら實事を傳へるのに苦心したといつてある。これに據れば、傳右衛門は京の生れで道楽に身を持崩した が小藪が巧みであつたので因州侯に仕へて、笹部折右衛門の隣に屋敷を賜つた。笹部が在江戸の時、その妻のおげんと不義の噂が立つて傳右衛門は大阪に逃げ、こゝでも遊女を盗出して京へ逃げ上つた。やがて歸國した折右衛門は實証を突附けて妻の首を打つたが、妻の妹のお梅が先づ敵討を志して義兄弟の金助と共に折右衛門と合して傳右衛門の在處を突止め、金助お梅は鎖帷子を肌に着け蘇谷笠をきて入込んだ。お梅は先づ撃をかけ、折右衛門かめでたく敵を討取るといふ事にしてあるが、傳右衛門の妻が長刀を抜いて手向つた事も書添へてある。「蘇谷女鍋笠」といふ顚末、「京鍋鎖帷子」といふ命名もこれで知られるだらう。

近松は寶永四年に至つてこれを上中下の三段に仕組み「堅田源の藪」と題し、苏天の名を宮地源右衛門、毒婦をおたぬ、實天を小倉彦九郎と改め、妻の妹はおふぢ、彦九郎の養子に文六といふがある事にした。十分に同情を寄せて描いてあるが、それでもおたぬを國に名取の漁者と断つて『小身人の悲しさは隔五のお江戸苦。お國に居ては毎日のお咸詰。月に十日のとまり番。夫婦らしうしつぽりと、いつ語らひし夜半もなし云々』と云はせて、悲劇成立の成線としてある。而してそのおたぬが文六の藪の師匠源右衛門との関係も、生れつきの酒癖に基く事にした。而して日頃おたぬに思をかけてゐた相役の磯邊原右衛門が刃を抜いてまでの脅迫に一時逃れの嘘し詞を出しにのを源右衛門に聞かれて、その口をふさがうとして遂にあさましい行爲をなす事にしてある。この盃酌乱醉から道を踏み外す所の描寫は実に眞に迫つてゐて、歌舞伎では實感桃發のおそれがあり、到底演出されさうにも思へない。おたぬが雨に濡て送り出す所を灰右衛門が見つけて二人の袂をとり、源右衛門は股差で細下を切りすて、逃げたが、これが退引ならぬ証據物となつた。こゝまでが上の巻。

中の巻は忠勤が顚はれて加増の恩命を蒙り、殿のお伜して彦九郎が

勇んで帰國すれば妹聟から眞字を送って来た。おふぢは彦九郎に執心の體を見せておたぬを離縁させやうとしたが効もなく、おたぬは死遣へて散々に妹を打擲し、妹がこれも病の余を助けたい爲、堕胎薬は何の爲といはれておたぬも酒が敵と悲歎の涙にくれる時、彦九郎の妹ゆうが長刀とつて彦九郎を追ひつめ、一家中の認判と床右門が奪った二人の衣を示した。彦九郎は持佛堂に火を燈させ、その前で妻を刺殺しそこより直ちに暇乞をして京に上る。茲に示ぢ、文六並に妹が同行したいといへば、それほどに思ふなら何故最前におたぬに衣を着せ尼にしてはくれなかつたかと叫び泣きをする。

下の巻は祇園會の当日敵の嫁子と探り抜いて裏表より一時にうつて入る。源右衛門もよく戦ひ、殊にその妻が長刀で渡合ったが、終くめでたく討取った事にしてある。これも實事物語といふ意味で『咄の通り眞直に言へば言はるゝ舌三寸の禍の評判とぞなりにける』と結んだ。

これも「堀江河波の鼓」と題した正本もある。内容に差異はないが

「堀江河」とある方に埋木の跡も見えて、何故尼にしなかったかといふ條数行が尺オて居る。ひよつとしたら此の方が前だったかも知れないが、「堀河」とある方が人情味に富む。これも繰返されなかった作である。

明治三十五年四月伊井蓉峰の彦九郎、河合武雄のおたぬで東京の眞砂座で演じ、ついで四十五年三月同じく伊井、河合等によって新富座で興行せられた。大阪では大正三年四月中座でこれを演じた。何れも原作を傷つないで様にとしたものであった。

2、鑓權三重帷子。

西沢一風が享保二年のうちに脱稿して三年の春頃に出版させたらしい「乱脛三本鑓」の序に『人たる女房をたぶらかす事八逆罪の科人、その罪同前たるはまゝ多く、就中京の大經師のおさん、大阪にては樽屋のおせん栗田口、野江に屍を曝されしためし、是等は町人なれども國法のがれず、それさへあるに近江武士たる者、人の妻をぬすみ國を立のき、雀波に上り身を隠すといへども、天の網にかゝって遂に刄に伏して、一家に恥

を與ふるやから一人二人三人あり。先ず州洋山の何某一とせ大阪田辺屋橋にて見付られ、大川に紅葉を流す。長の沙汰止まざる内又々丹州笹山の誰、是も大阪にてめぐり過ひ丹波國猪野目村へ逃げ、ここにて捕たる、是二つ。三つにはことし七月十七日雲州のそれ、大阪男の浮橋ゆえ本意を達し、橋上をくれなゐになせし事その隠れなし、捕つゝ打たるゝも武士、殊に鑓一筋づゝも持たせるに紙近頃のものゝ如き事云々」とあるも誠にあはまじき事ながら頗る的な元禄の世の様は此の出来事の上にも反映して居たのであつた。殊に著名なのは此の雲州武士の事件で、これに関する著作物も幾種か出た。實事はやはり「月堂見聞集」（巻の九）に載せてある。

喜敬	近習中小姓	池田文次	年廿四才
女	正井宗味妻	とよ	〃廿六才
實夫	茶道役	正井宗味	〃四十八才
とよ親		小林幸左衛門	

幸左衛門子		小林弥市郎	
宗味子三人	姉	くめ	年十三才
	弟	鉄太郎	〃十一才
	妹	よそ	〃八才

とあり文次とよの両人は六月八日に國元を出発して同廿三日に大阪へ着、宗味は六月廿七日に江戸発足、七月十三日に大阪町奉行に訴つて同十七日に討取つたと書いてあゐ。とよの弟弥市郎が宗味を助けて大阪へ赴き二人の宿所を尋ね出して誘き出し、十分に討取る利便を與へたのである。恰も盂蘭盆の時ではあり、大評判となり、京大阪の歌舞伎芝居は早速これを仕組んだ。殊に吾妻三八は一座作りにして大當りをとつた。近松が表題の依を與行させたのは八月廿二日からの事で、これに先立つて作者不明の小説「女敵高麗茶碗」三冊が出た。序文にかうある。「雅波の芝居に八つの稲先をあらそひ、盆替りの間もなく、場所の働目き驚かし實や好色橋非慶とは、近松門左が思ひつき、浮世は夢の浮橋とは吾妻三八

が極向の外題なり。是ぞ因果はまはり燈籠の歳にはひき次ぎつたへたる女敵討、名高き橋の咄しとそのまゝ、取りつくろはずたて語けて、高麗茶碗と此書をいふのみ、時に享保貳つのとし七月廿一日とある。これに據れば近松の筆になつた浄るりに「好色橋弁慶」と題したものが先づ出たらしいが、すぐに禁止てもされたか斯う題したものを見たことがない。

「女敵高麗茶碗」は雲州松江の家中増千宗茂が殿の伐をして在江戸の留守に、養子の約束をしてある生田源次に仲居のさよが言ひ寄る。源次も受入れた。妻のまつ恵が諫めやうとして燈火のない所でとりちがへられ辛うじて危い場所を脱したが、源次の機悔の男らしさに感じ入つて自分も口外せまじと互に誓文を取交した。それをさよが覗き見て、歸國したばかりの宗茂に告げた。宗茂は妻を何事なく親元へ遣はし、源次の行水中にその字袋から妻の誓文を取出した。そこへ殿の急なるお召に取敢へず御前へあがる。行水仕まつて茶た源次は誓文のないのに氣附き、さよとの不義が詮議される事を恐れ

まつ恵に一筆書残して國を立退いた。

願ひはく歸宅したまつ恵は書置き見て、いくらか言甫きの出來るものをと跡を追ひかけた。宗茂は不義と認めて女敵討の旅に立ち、両人は今更歸られない首尾となり、遂に心ならずも道を踏み外して大阪に逃げたが高麗橋で討たれる事に仕組んである。そうして巻末に此人達の年の十二遠ひの事、服装や傷の模様なども奇しく記し、まつ恵の弟が助力した事も記してある。斯様に仕組んで女中を介在せしめたのに、一説正徳五三に近松が綴つた「大経師昔暦」に準かれたものであらう。又、女敵源次が宗茂の妻から茶碗を割つた言譯を頼まれ有中をはせて口説きおとすといふ極向は既に早雲座の芝居にあつた。高麗茶碗と題したのは暗にそれに據つた事を示したものでもあらうか。前にいふが如く他に「乱脛三本鑓」があり「雲州松江の鑓」と題した小説もあるが、どちらも近松の浄るりよりは後の作と認めるので省略する。近松の「鑓の權三」は思ふに「好色橋弁慶」の改作で、歌舞伎狂言の筋とも多少は関係があらつと思ふ

が、狂言本が発見されてゐないので遺憾ながら言及することが出來ない。

近松は官權を憚つたのか、人の名も所も書へて、古く鑓の名人として記はれた笹野權三重を長天とし、女の名をおさゐ、實夫の名を浅香市之進と改め、討取る場所も伏見の京橋にした。上下の二巻から成るが、例の如く假設の人物を點出し紛糾を起さしめ、舅姑の恩愛や義弟の義理強さや、子供の覚悟のいぢらしさによつて見物の袖を絞らせやうとした。それが成功した。恐らく此人の傑作の一として挙げてよいであらう。上の巻は權三が濱の宮の馬場で馬を馴らしてゐる所へ、い、仲のお雪が來て比翼紋の帯を贈る。お雪の兄の川側伴之丞が來て權三と競馬して落馬するをかしみがある。そこへ來道役浅香市之進の舅（即ちおさゐの實父）が來て、江戸からの申送りだが眞の臺子の傳授を受けて御奉公をせよと言渡す。両人共に市之進の弟子なのである。次は市之進の家の場で、妻のおさゐは板目なく家事に心を奪はれてゐる。所へお雪の乳母が權三お雪の媒酌を頼みに來た。おさゐは自覚せずに權三を愛してゐたので嫉み

の情火が燃え立つた。そこへ權三は傳授の願に來た。おさゐは一子相傳の事であれば娘を妻に貰ふならばといふ。當世男の權三は承諾の旨を答へ、さらば今宵教書屋に於て巻物をといはれて帰る。近松はおさゐを「さすが茶人の妻。物数書もよく氣も伊達に三人の子の親でか、、草箒骨細く生れつき、風しのばしくゆかしくの。三十七とは見えざりし」と説明し娘のお菊が權三とは年が違ひすぎると言へば「栄耀言はずと殿御に持ちや。其方がいやなら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿といふ男持たねば、人手に渡す權三樣ぢやないわいの」と言はせてゐる。此の女と血氣壮の權三とが深夜會見するといふのである。危険は何人にも豫想せられやう。果然大珍事となつた。權三の締めて居た比翼紋の帯はおさゐに認められ、それを解いて此の帯をと自分の帯を出した。權三も男、しはや堪へかねて二つの帯を座へ投げ出した。それを伴之丞に拾はれた。彼は日頃おさゐに文を附けてゐた。今宵も愁と色との二道かけて教書屋の庭に忍び込んでゐたのである。權三は腹を切らうとする。おさゐは止めて

『とても死ぬべき命なり又今二人が間男と。いふ不義者に成り極めて。市之進に討たれて男の一分立て、進ぜて下され云々』といふ。權三は無念の涙を流しながらおさゐを連れて立退く。おさゐは子供を後に残すといふ悲しみと權三と運立つといふ嬉しさと相半したであらうが、權三は時に泥沼に引入れられる如き怨みに堪えかねもしたであらう。下の巻は道行に始つて、両人が伏見の墨染の里に辿り着くまでを敍して『十二道ひの月更けて姉とも言はゞ岩枕、交す枕が思ばくし、影はづかしや、野辺の草』とあるので彼等はも早討取らるべき行焉を遁げてゐたのである。次はおさゐの荷物が里方へ送り返され、門前で焼き棄てられるのだが、長持の蓋を開けると中から二人の娘が出た。これも近松の創案ではないかも知れぬが、此の所の老父母の悲歎の描写は人の腸を寸断せしめる。そこへ市之進が暇乞に來、おさゐの弟甚平が伴之丞の首を打って來て、二人がいざ同道といふ所へ、一子虎次郎（十一才）も旅仕度で來て聽し止められる。此のあたりは義理と恩愛を別にして立たなければならない

武士の身の上を描き出して見物にとめどもなく涙を流さしめる。さて七月中旬踊りの夜伏見の下り船から引返した權三おさゐをのでたく討取るのだが、權三の最期をあつぱれにし、甚平には刀を抜かせない事にして、飽くまで武士の面目を損はないやうにし『鑓の權三が古身の鑓、疵も古疵、話しも古し、歌も昔の古歌なれど谷の芦辺一夜さ語云々』と結んである。或は最初の作詞ち「好色橋赤慶」が餘りにも写実に過ぎてその筋から注意を受けたのではないかと想像される。鑓の權三の外題は『さらぬだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまな重ぬそ（新古今集巻二十釋教）の古歌に基くものだが、「高麗茶碗」の終りにおさゐの服装を記して『着類、下に白帷子、上は光琳の梅、墨絵の立木云々』とあるに導かれたものであらうか。

此の作はあまり繰返されなかった。延享四年に至って浅田一鳥、但見弥四郎の合作「襤褸紅海服（えで）」が豊竹座で演ぜられた。次と原作に劣る。安永九年には達田幹二、吉田鬼眼合作の「襤褸血紅政（らしほかあかまさ）」が江戸の肥前座

で演ぜられた。これは原作の趣案で一向注目に値するものではない。明治四十二年に至って東京座で芝翫（歌右衛門）のおさめ、羽左衛門の種三で原作を演じたが、淨瑠璃を讀んで想像するほどの場面に接し得なかった。大正三年帝劇に於て岳幸・延二郎で「引眺重帷子」と題して演じそがこれは見落した。蓋し歌舞伎では実感飛発に陥り易くて写実を見せ難い作であったのである。

5、大経師昔暦

近松は「鑓權三重帷子」に先立つ等三年、正德五年に此作を出した。然不「外題年鑑」に據って寶永三年九月に興行されたものであったが、此作の終りに『当年未の初暦めでたく、ひらきはじめける』とあって、正德五年の未の歳の興行であることは疑がない。此の作には別に「貞享元年情柱暦」と題したものもあり、後になっては「恋八卦柱暦」と題を改めもしたが、此の卷末の文句には相違する所がない。詳しい事は明治四十二年に私がその考証を「新小説」に掲げ、ついで大正四年私の「歌舞

音曲考説」の近松著作考のうちに收めて置いた。

事件は京の大経師の妻のおさんが手代の茂兵衛と姦通して出奔し、捕へられて粟田口で磔刑にあひ、仲介者のたまと云ふ女が獄門になった事で、その處刑の詳しい事は「享保以前近畿夫婦仕置之振合町代書留」の中に詳細に記してある。（「趣味」四卷三号所載）。早く西鶴の「好色五人女」卷三にもしるく敍してある。それには都の道楽者達が藤見帰りの婦人達を品評して第一の美婦と定めたのがおさんで、夫の大経師が東の方へ赴いた留守に、里からつけた手代の茂右衛門と接元のりんとの中を取持にうとして艶書の代筆をしてやり、恵巫山戯がこうじてりんと床を取替へ、つい熱胆中に道を破った事にしてある。西鶴はもとおさんを氣の強い當世女にして、駈落に際して五百両といふ大金を身につけたとしてある。二人は琵琶湖に投身した後に見せかけ丹後路に入り切戸の文珠に隠れてゐたが、費用の話から知れて捕へられて『中の便せし玉といへる女も同じ道筋にひかれ粟田口の露草となりぬ。九月廿二日の

曙のゆめさらく〜最期いやしからず。世語となりぬ。今も浅黄の小袖の面影見るやうに名はのこりし。」と結んである。巻頭に「天和二年の暦云々」とあるが、處刑は三年の秋の事であつた。二十に満たない美しい女であつただけに評判は高かつた。

西鶴についでは歌祭文が是を材とした。これが最も事実に近さうだが、その文中に「五人女の一の筆。世の口ずさみ一音」といふ句があつて、元禄に入つてからの作である。やはり天和以春の江戸行の留守に茂兵衛の方から下女の玉を媒介にして言入れ、應じたおさんは遂に懐胎し、玉と三人で姿を晦ましたお宿へ入れる事にしてある。是についでは小豆庄兵衛作「踊音頭」の歌で、寶永元年に出版になつた「落葉集」に收めてある。これは處刑の翌年即ち貞享元年の盂蘭盆におさん茂兵衛の新精霊が出て来て懺悔話をする事に敍してある。

近松のものは彼等両人の三十三回忌に及んで興行したもので、實事をもとにしながらも幾多の假説人物によつて曲折と同情を惹起する様にして

ある。上の巻は大経師の以春が下女のたまに想をかけて夜なく口説くが靡かない。たまは手代の茂兵衛を深く思つてゐるのである。大経師の妻のおさんは里方からの頼みに、茂兵衛に金の工面を依頼し、茂兵衛が引受けて以春の判を押す所を手代の助右衛門に見付けられた。助右衛門はおさんに想を寄せてゐるといふ細くない奴である。たまは潰み手は自分だと名告つて出て、茂兵衛は隣の明屋に監禁された。夜更けておさんは一礼の心でたまの寝所へ行けばたまは以春の魂情を物語る。さらば今宵は床を替へて以春を辱しめるといふ事になつた。とも知らず茂兵衛は、これもたまへ一礼の為思ひ果つて、こゝに主従思ひもよらぬ不義に陥つて了ふ。西鶴の如く熟睡のうちにといふ方が自然だが、人形ではこの方が演じて効があつたらう。さても元禄の世だと評したい。

中の巻は近松が全く筆の元で綴りてたのだが、義理と恩愛に泣かされる。おさんに茂兵衛は駆落をしたが、たまが伯父太平記講釈師赤松梅龍の許に預けられたと聞いて尋ぬて来て、その道でおさんの両親が黒谷か

らのかへりに出會ふ。助右衛門がたまに縄をかけて來て、梅龍に痛めつけられる所は見物の溜飲を下げにてあらうが、その梅龍がたまにこれより後の心得方を説く所や、おさんの両親が叱りつ許しつ情を籠めて遁走を勧め、黒谷から借りて來た一貫目を路用の金に与へるあたりは、どんな木石漢でも泣かされる。西鶴はおさんを大金をくすねて逃げる女にし、近松は悪一文で出で路用に窮して肌着を責る女に写し出してゐる。自然あはれは近松の方に満ち渡つてゐて、西鶴の後にどこやらに嘲笑の霧のかゝつてゐるのではない。下の巻はおさん茂兵衛は丹波國に隠れてゐたが、金を預つた家主の密告により役人に捕へられる。そこへ助右衛門が出て引渡しを申出てさんぐ叱りつけられる。梅龍かたまの首を持つて來る。代官の役人は早まつた事をした、肝心要の証人がなくなつた上は両人の罪科は極つたと、首を一緒に両人を引立てる。梅龍はその腹癒に助右衛門に切り付ける。何處までもおさん茂兵衛に同情して相手方を懲しめやうとする行き方。

次は道行で「おさん茂兵衛こよみ歌」と題してある、暦の中段の詞を綴にして、おさんは十九、茂兵衛は二十五で、一頭の馬に背中合せに乗せられて粟田口の刑場に向ふ事を叙し、かの踊音頭の歌を引用してあはれを催ほさせる。おさんの親が出で命乞をして許されず、黒谷の東岸和尚が衣を打かけて両人を救ふ事にしてある。

宇治糸屋孫の正本に「昔暦三十三回忌と題して同一文章のものがあれば、追善の意になる事は明かで正徳五年正月の興行は動かし難い。此の正月に大阪の嵐三十郎座で、おさんは若女方の嵐三郎四郎、茂兵衛は立役の阪東彦三郎、以春は立役の山村儀右衛門、おさんの父は座元の嵐三十郎、母は女方の霧浪瀧江、助右衛門は実悪の大島道右衛門で出して、彦三郎の茂兵衛が好評であつた。享保十四年には大阪の中の芝居で「おさん茂兵衛 色暦浮名三越」と題して興行した。歌舞伎ではこれも実感発のおそれがあつたと見えてさう繰り返してゐない。文化文政又は安政文久の頃に至つて却て時々演ぜられたが、これも刺戟が強すぎた様に當時

の役者評判記に書いてある。

様りては元文五年近松の十七回忌に「恋八卦柱暦」と改題して演ぜられた。又明和八年北堀江座では「本朝女鑑昔暦」と題し、北勝義人、深雪姫、中村阿契等が改作して演じた。"原作も近く文化文政以後に於て大経師内の場だけが繰返された。壺後前では天明四年堂本で「茂兵衛情の水」が出て、ついで同六年菅楽津に「浮名草月小夜衣」が出、文化十三年に清元で「おさん茂兵衛田舎の暦歌」文政七年に富本で「濡紙浮名綻」が出た。やはり濃艶な所が客を呑んだのであらう。明治三十五年新派俳優が近松研究を試みて、眞砂座に於て伊井の茂兵衛、河合のおさんで出した。原作に忠実であらうとして随分苦心としたがその割合には栄えなかつた。

因に云ふ。寶永元年刊「心中大鑑」巻四の大阪の部に「袈裟御前の裏表」と題して、石津屋次郎兵衛の妻のおさんが夫の弟市郎兵衛に下女のたまへの橋渡しを頼まれ、自身が入り替つてたまの床にねて、その後度重つて事顕はれ、大は特赦を戒めて許してくれたが、両人は恥

入つて心中したとある。此の事がおさん茂兵衛関係の文学に深い交渉があらうかと考へてゐる人がある。もしあるとすれば、それは石津屋事件を大経師事件にひきつけてをもしろく書いたもので、或はおさんやたまといふ名だけでも一致して居たのであらうか。

昭和八年九月二十二日印刷
同　年九月二十八日発行

東京市本郷区真砂町三八
編輯兼発行者　恩地久夫

印刷所　啓明社

東京市本郷区真砂町三八
発行所　啓明社
電話小石川七八二三

不許複製

終